

日本語指示詞の歴史

——聞き手領域指示の問題を中心に——

澤田 淳

1. はじめに

本稿では、日本語の指示詞の運用の歴史において、聞き手領域指示のあり方がどのように変化してきたのかについて考察を行う。

本稿の構成は次の通りである。2節では、現代語の指示詞の体系について、「有標／無標」の観点から論じる。3節では、上代語の指示詞の体系について、「上代カ系未発達説」を検討しつつ論じる。4節では、聞き手領域指示の歴史について、カ系・ア系とソ系との関係に注目して論じる。5節でまとめと展望を行う。

2. 現代語の指示詞の体系

はじめに、現代語の指示詞の体系を整理しておこう。本稿では、現代語の指示詞は、図1に示すように、遠近の距離指定を含む「有標」の指示形式であるコ系／ア系と、元来遠近の距離指定を含まない「無標」（「中立」）の指示形式であるソ系からなると想定する（澤田淳（2024））。

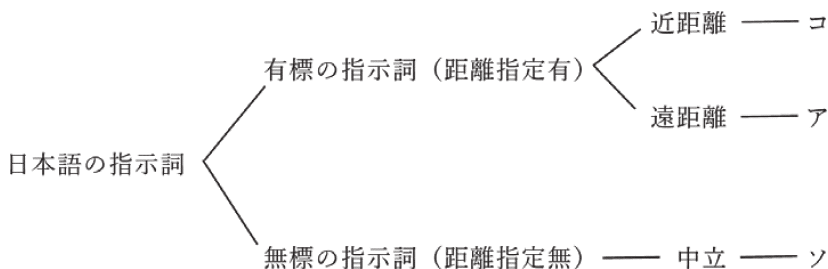


図1：現代語の指示詞の体系（澤田淳（2024：147））

日本語指示詞の体系を「コ系・ア系」と「ソ系」の対立として捉える見方は、「コ系・ア系」と「ソ系」を、「強烈指示」と「平静指示」の違いとして捉えた堀口和吉（1978）、「直接的知識（体験的知識）」と「概念的知識」への指向の違いとして捉えた黒田成幸（1979）、「直接経験的領域」と「間接経験的領域」の指定の

違いとして捉えた金水敏・田窪行則（1992）などにも認められる見方であるが、図1では、「コ系・ア系」と「ソ系」の違いを、「有標」と「無標」（または、「近接・遠隔」と「中立」）の違いとして捉える点に特徴がある。また、三上章（1955：179、1970：147-149）は、ソ系は、照応用法（文脈承前）として機能する場合には「意味が中性化」して「中立称」となっているとするが、本稿の立場では、ソ系は、本来的に「中立的」な指示詞であるために、照応（文脈指示）の領域においても、指示対象を「中立的に受ける」最も基本的かつ無標の指示詞として用いられているのだと考える（澤田淳（2024：147））。

指示詞の直示用法（現場指示用法）を記述する際に利用される一般的な概念として、「距離」と「人称」がある（Fillmore（1982）、Anderson and Keenan（1985）、Diessel（1999、2013）、金水敏・岡崎友子・曹美庚（2002）、澤田淳（2016a、2024）など）。現代語の指示詞も、「距離区分」と「人称区分」の観点から、一般に、次のように記述されている。

（1）距離区分：

コ系：話し手の近くにある対象を指す。

ソ系：話し手からやや離れたところにある対象を指す。

ア系：話し手から遠くにある対象を指す。

人称区分：

コ系：話し手の勢力範囲（なわばり）内に属する対象を指す。

ソ系：聞き手の勢力範囲（なわばり）内に属する対象を指す。

ア系：話し手・聞き手の勢力範囲（なわばり）外の対象を指す。

（1）の距離区分と人称区分とで、コ系とア系の特徴づけに本質的な違いはないが、ソ系の特徴づけは大きく異なる。それぞれ、「中距離指示用法」のソ系、「聞き手領域指示用法」のソ系と呼ばれるものである。以下の（2）のソ系は中距離指示用法、（3）のソ系は聞き手領域指示用法を表す。

（2）「芝村さんの別荘はどこですか？」

東が玄関の中で女中に訊いた。

「はい、すぐそこですが」

女中が表に出て右のほうを指した。旅館から少し離れたところに別荘らしい家が外灯の光の蔭に暗くならんでいた。

〔中距離指示用法〕（松本清張「火と汐」『松本清張傑作総集Ⅱ』所収、407頁）

（3）三原真佐子がさっさと編集局長の横に入り込んだ。順子はそのあとに

従わないで、車を回って運転手の横の助手席に入った。
「あら、そんなところに坐らなくても、十分ここに余裕があるわ」
真佐子が横に一緒に乗るように誘ったが、順子は局長に背中をみせた
ほうがずっと気が休まった。
「ここで結構だわ」
順子は小さな声で言った。
「そこに乗ることはありませんよ。こっちにいらっしゃい」
順子に呼びかける局長の声がすぐ背中から響いた。
〔聞き手領域指示用法〕（松本清張『翳った旋舞』78頁）

現代語では、「中距離領域」（＝話し手を基準として、そこから近とも遠とも指定できない領域）と、「聞き手領域」（＝聞き手が基準となるため、話し手を基準とした遠近の距離指定ができない領域）は、いずれも「話し手からの遠近の距離指定ができない領域」であると認識されており、中立のソ系によって指示される（澤田淳（2024））。

3. 上代語の指示詞の体系

山田孝雄（1954：77-78）は、上代ではカ系の用例が限られていることから、元来、日本語の指示詞は、コ系とソ系のみであり、遠称カ系は後代において発達したとする説（以下、「上代カ系未発達説」）を提示している¹。この山田の説を敷衍する形で、橋本四郎（1982：221-224）は、上代語の指示詞の体系は、「感覚の世界を指示するコと観念の世界を指示するソの二元的対立を基本とする構造」であり、「カの指示は元来独立したものではなくて、コとのかかわりの中で成立

¹ 山田孝雄（1954：77-78）の次の指摘を参照されたい。

- (i) 第三人称の遠稱には平安朝以後「あ」「あれ」といふ形もありたれど、この頃（本稿筆者注：奈良朝）にはその形は未だあらはれずして、「か」「かれ」といふ形のみあり。しかもこの「か」「かれ」といふ語もこの時期には多く用ゐられざる様なり。（中略）この「か」「かれ」は當時さまで勢力ありきともおぼえざるなり。おもふに、この「か」「かれ」といふ詞は、當時成立後多くの時を経ずして、この時代より遠からぬ前の時代には存在せざるものにてありしならむか。かくて、又この「か」「かれ」の成立せざりし時代には、わが第三人称の定稱の代名詞は「こ」「これ」と「そ」「それ」との二種類のみにてありし時期ありしにあらざるか。かくいふ故は「か」「かれ」の用例がこの期の文獻に稀なるが故のみにあらず。後世「かの」「かれ」と訓ずる「彼」字を當時「その」といへる證あればなり。
- （山田孝雄（1954：77-78））

した」(カはコの母音交替によって分化した)と論じている(橋本四郎(1966)も参照)。

上代文献に現れる「彼」は、ソ系としても訓まれ得る(山田孝雄(1954:78)、橋本四郎(1963))²。橋本四郎(1982:229)は、「万葉仮名表記を手がかりにして、明らかにカと認めうる上代の例」は、万葉集中の以下の3例に留まるとする。

- (4) かの(可能) 兎ろと 寝ずやなりなむ はだすすき 浦野の山に 月
片寄るも (万葉集・巻第十四・3565)
- (5) 沖迎より 満ち来る潮の いや増しに 我が思ふ君が み舟かもかれ
(加礼) (万葉集・巻第十八・4045)
- (6) 暁の かはたれ時に(加波多例等枳尔) 島陰を 漕ぎにし船の たづ
き知らずも (万葉集・巻第二十・4384)

(4)の「かの」は観念用法(記憶指示用法)、(5)の「かれ」は、直示用法(現場指示用法)と解され、この2例については、小田勝(2015:624)も、上代文献中のカ系の確例とする。(6)の「か」は、複合名詞「かはたれ時」の構成要素であるが、橋本四郎(1982:230)は、「その背後に不審な人影を誰何する言葉「かはたれ」の存在が想定できる」とし、カ系(遠称)の「か」とみなす。ただし、(4)は東歌、(5)は平安時代になってから補修を受けたと考えられる歌³、(6)は下総国の防人の歌であり、橋本四郎(1982:231)は、これらの点は、上代における「カの一般性を認めるためにはマイナスの要因となる」とする。

上記のような上代カ系未発達説に対しては、江富範子(1988)において反論が提示されている。江富範子(1988:21)は、万葉集中の「カの用例数がコ・ソに比べて少ないために、それをカの発達の遅れの現われと見る見方もあろうが、上代語の中心資料である万葉集が歌集であるという資料としての限界を考慮するならば、そうした見方は妥当とは言えない」とする⁴。近年では、衣畑智秀(2021:210)も、「上代における遠称の例の少なさは、カ系列の未発達よりも資料の制約によるものと考えた方が良いだろう」とし、「遠称を表していた形態素については議論があるが、少なくとも直示には、コ系列とは異なる形態素があったと考えられ、二系列であった蓋然性が高い」点を指摘している。

² たとえば、次の例を参照されたい。

(i) 憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母(彼母)も 我を待つらむそ
〔照応用法〕(万葉集・巻第三・337)

³ 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之(校注)『万葉集(五)』(岩波文庫)、岩波書店、2015年、33頁参照。

以下、さらに、上代カ系未発達説を、(i) カ系の使用範囲、(ii) コ系の指示対象、(iii) 言語類型論の観点から検討してみよう。

第1に、上代文献に見られるカ系の使用範囲から検討してみよう。上代文献に見られる以下のような連語的表現内の「か」（「このもかのも」の「かの」、「たそかれ」の「かれ」、「か〜かく」の「か」など）もカ系（遠称）に含めるならば、上代においてカ系（遠称）が未発達であったとは必ずしもいえない⁵。

(7) …遠き代に 語り継がむと 処女墓 中に造り置き 壮士墓 このも
かのもに（此方彼方二）造り置ける… （万葉集・巻第九・1809）

⁴ 江富範子（1988：21）は、「例えば、古今集・後撰集においては、カ系の指示語の用例数（歌語に限る）は、古今集四例（「か」一例、「かの」二例、「かなた」一例）、後撰集二例（「かの」一例、「かしこ」一例）に過ぎない。また、後にカに替わる位置を占めるアも既に現われてはいるが、それもまた、古今集一例（「あなた」一例）、後撰集二例（「あなた」二例）のみ」であるとし、「萬葉集中のカの用例数が格段に少ないとは認めがたい」のであり、「集中におけるカの用例数の乏しさは、上代におけるカの存在を否定するに足る証とはならない」点を指摘している。

⁵ 『新編日本古典文学全集 8 萬葉集③』（2240番の頭注、133頁）にも、「上代語には遠称が未発達であったとする説があるが、『古事記』中の「かまが」（ああもしたい）をはじめ、「か寄りかく寄り」「か行きかく行き」「かにもかくにも」「かの児ろ」「かは誰」などかなりの数の例がある」との指摘がある。以下の続日本紀（797年）宣命、延喜式（927年）祝詞の例も参照されたい（なお、「延喜式祝詞を奈良時代の日本語史資料として扱うには十分注意しなければならない」（築島裕（監修）・沖森卓也（編）『東京国立博物館蔵本延喜式祝詞総索引』『解説』529-530頁）との指摘もあるが、ここでは、続日本紀宣命、延喜式祝詞ともに上代語を残す資料である点を鑑み、「日本語歴史コーパス」の部類に従い、便宜上、奈良時代の資料とみなしておく）。

(i) 負け賜ひ宣り賜ひし大命に依りて、かにかくに（加尔加久尔）年の六年を試み賜ひ
（続日本紀宣命・第七詔・天平元年八月壬午（巻十）・17頁）

(ii) 遠長く平けく、恵び賜ひ安め賜はむと、彼の国の王（彼国乃王）には語らへと詔り
（続日本紀宣命・第五十七詔・宝龜八年四月癸卯（巻三十四）・112頁）

(iii) 彼方の石川（彼方古川）の度り・此方の石川（此方乃古川）の度りに生ひ立てる若水沼間の、
（延喜式祝詞・出雲国造神賀詞・138頁）

なお、山田孝雄（1954:79-81）は、上代文献に現れる連語「か〜かく」の例を挙げ、「「か〜かく」は今の語にて「此の様に」といふ如き意を有する副詞にして「か」は今の語にて「あの様に」といふ如き意を有する副詞たるは明らかなり」とし、この副詞「か」が代名詞「かの」「かれ」に変化したと想定している。

- (8) 誰そ彼（誰彼）と 我をな問ひそ 九月の 露に濡れつつ 君待つ我を
（万葉集・巻第十・2240）
- (9) 誰そ彼（誰彼）と 問はば答へむ すべをなみ 君が使ひを 帰しつるかも
（万葉集・巻第十一・2545）
- (10) …この照らす 日月の下は 天雲の 向伏す極み たにぐくの さ渡る極み 聞こし食す 国のまほらぞ かにかくに（可尔迦久尔） 欲しきまにまに 然にはあらじか
（万葉集・巻第五・800）
- (11) …五月蠅なす 騒く子どもを 打棄てては 死には知らず 見つつあれば 心は燃えぬ かにかくに（可尔可久尔） 思ひ煩ひ 音のみし泣かゆ
（万葉集・巻第五・897）
- (12) …夕されば 風こそ来寄れ 波のむた か寄りかく寄る（彼依此依） 玉藻なす…
（万葉集・巻第二・138）
- (13) …夕星の か行きかく行き（彼往此去） 大船の たゆたふ見れば 慰もる…
（万葉集・巻第二・196）
- (14) …松田江の 長浜過ぎて 宇奈比川 清き瀬ごとに 鵜川立ち か行きかく行き（可由吉賀久遊岐） 見つれども…
（万葉集・巻第十七・3991）

第2に、コ系の指示対象の観点から検討してみよう。上代カ系未発達説のもとでは、上代では、カ系が未発達である一方で、コ系が遠近の距離を問わず、広く現場内の対象を指示していた点が想定されている。橋本四郎（1982：225）は、上代語のコ系は、「感覚可能な領域に存在するすべての対象を指示しうる」とし、「未分化の「こ」も、事物・場所・方向に分化した「これ」「ここ」「こち」なども、表現主体が現に知覚しつつある対象でさえあれば、主体との遠近・親疎にかかわりなしに指示機能を果たす」とする。小田勝（2015：624）も、「指示代名詞がコとソとの2対立だった時代には、空間的・時間的遠近による指示代名詞の使い分けはなされていなかった」とし、次の例のように、「直示は遠くでも「こ」である」とする。

- (15) 春日山 おして照らせる この月（此月）は 妹が庭にも さやけかりけり
（万葉集・巻第七・1074）

しかし、遠くの対象でもコ系で指し得る点は、必ずしも上代語に特徴的な現象ではなく、次のように、現代語でも観察される。

- (16) 読み終わると、政子はふっと眼をあげた。初冬の月は、少しずつ光を

おびはじめている。まぶたの裏には、冬枯れの伊豆の峰々が、薄くうかんで消える。どこからか笛の音が流れて来た。誰が吹くのか、ゆるやかなしらべは、冴えざえした冬の宵にいつまでもたゆたっている。——頼家もこの月を眺めているのだろうか。そう思ったとき、政子はふいに、胸をしめつけられた。

(永井路子『北条政子』)(BCCWJ)

次の例では、遠くに見える八ヶ岳をア系で指していた話し手が、途中からそれをコ系で指している。ここでは、一定時間視覚的注意を向けることで、八ヶ岳までの距離感が捨象され、コ系の使用が可能となっている(澤田淳(2024))⁶。

(17) 私は何も言わずに、彼女の側に並んで、同じ方角を見つめた。

彼女が再び快活そうに言った。「此处まで出ると、八ヶ岳がすっかり見えるのね」

「うん」と私は気のなさそうな返事をしたきりだったが、そのままそうやって彼女と肩を並べてその山を見つめているうちに、ふいとい何んだか不思議に混んがらかったような気がして来た。

「こうやってお前とあの山を見ているのはきょうが初めてだったね。だが、おれにはどうもこれまでに何遍もこうやってあれを見ていた事があるような気がするんだよ」

「そんな筈はないじゃあないの？」

「いや、そうだ……おれはいま漸々と気がついた……おれ達はね、ずっと前にこの山を丁度向う側から、こうやって一しょに見ていたことがあるのだ。いや、お前とそれを見ていた夏の時分はいつも雲に妨げられて殆ど何も見えやしなかったのさ。……しかし秋になってから、一人でおれが其処へ行ってみたら、ずっと向うの地平線の果てに、この山が今とは反対の側から見えたのだ。あの遠くに見えた、どこの山だ

⁶ さらに、次の例を見てみよう。

(i) 梅の花 散らくはいづく しかすがに この(許能)城の山に 雪は降りつつ
(万葉集・巻第五・823)

「城の山」は太宰府北方の大野山を指す。『新編日本古典文学全集7 万葉集②』(頭注、43頁)は、「コノは太宰府政庁から間近に見えるので用いた現場指示的用法」であるとす。衣畑智秀(2022:643)は、「明らかに対象指示までの距離はあるが、山を大きく感じれば、近称で指示することもありうる例であろう」とする。いずれにせよ、現代語でも、「この山」とコ系で指せる例である。

かちっとも知らずにいたのが、確かにこれらしい。丁度そんな方角になりそうだ。……お前、あの薄がたと生い茂っていた原を覚えているだろう？」

「ええ」

(堀辰雄「風立ちぬ」『風立ちぬ・美しい村』所収、159-160頁)

第3に、言語類型論の観点から検討してみよう。上代カ系未発達説のもとでは、上代以前の日本語において、直示は一項体系であり、現場内のあらゆる事物は遠近の区別(指定)なしに指示されていたことになるが、そのような言語は、世界の諸言語において確認されるであろうか。世界の234の言語の指示詞(連体指示詞)の体系を調査したDiessel (2013)によれば、7言語が一項体系、126言語が二項体系、88言語が三項体系、9言語が四項体系、4言語が五項以上の体系をなすとされる。そこでは、一項体系の言語として、フランス語、ドイツ語、ケラ語(Kera)(チャド語派)、クルンフェ語(Koromfe)(ニジェール・コンゴ語族)、コイラボロ・センニ語(Koyraboro Senni)(ナイル・サハラ語族)、スピレ語(Supyire)(ニジェール・コンゴ語族)、マム語(Mam)(マヤ語族)の7言語が挙げられている。Diessel (2013)によれば、このような一項体系の言語であっても、一般に、2つの対象や位置の距離的な対比を示す少なくとも2つの副詞的指示詞(adverbial demonstratives)(ないしは、直示的不変化詞(deictic particles))が存在し、これらの副詞的指示詞(直示的不変化詞)を付け加えることで、2つの対象や位置の遠近の区別が可能となっているという(さらに、Diessel (1999: 36-39)、Levinson (2004: 116-117)、Huang (2014: 192)を参照)。たとえば、フランス語の連体指示詞(指示形容詞)ceは、距離の点で中立の指示詞であるが、名詞の後に-ci(近)、-là(遠)を付けることで、話し手から指示対象までの遠近の距離の区別が可能となっている(例: ce livre-ci(この本)、ce livre-là(あの本))(Anderson and Keenan (1985: 280)、Diessel (1999: 37)も参照)。

言語類型論的観点からは、現場内(眼前)のあらゆる対象を遠近の区別(指定)なしに指示する言語(すなわち、直示において遠近の距離区分が反映され得ない言語)の存在は想定しにくいといえる。近年では、衣畑智秀(2021)が琉球諸語の指示体系の調査をもとに、琉球祖語、及び、日琉祖語の直示が二項体系をなすとする論を提示している。これらの言語類型論的・比較言語学的知見も踏まえるならば、上代以前の日本語においても、遠近の距離区分を反映した直示の運用がなされていたと想定するのは自然である⁷。

一方、資料的な制約を考慮に入れる必要はあるが、上代文献中のソ系においては、話し手の眼前の対象を直接的に指示する直示用法の確例が見出しにくい⁸。上代のソ系の中心的な用法は、以下のような前文脈での既出の対象を指す照応用

法（文脈指示用法）である（金水敏・岡崎友子・曹美庚（2002：231-232）、李長波（2002：132）も参照）⁹。

- (18) 憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母（彼母）も 我を待
つらむそ [照応用法]（万葉集・巻第三・337）
- (19) 池の辺の 小槻が下の 篠な刈りそね それ（其）をだに 君が形見
に 見つづ偲はむ [照応用法]（万葉集・巻第七・1276）
- (20) 一本の なでしこ植ゑし その心（曾能） 誰に見せむと 思ひそめけむ
[照応用法]（万葉集・巻第十八・4070）

金水敏・岡崎友子・曹美庚（2002：231）は、「韻文中心という資料的制約を十分に考慮に入れる必要がある」ものの、「少なくとも、ソ系列が直示を原型とする証拠は見出せない」とする。金水敏（1999：87-88）では、「直示用法がソ系の原型的用法であるという可能性の低い」点を指摘した上で、歴史的に、「文脈照応用法を足がかりにして、直示用法においてソ系列の領域が確定していく過程」が想定されている。本稿でも、元来、日本語の指示詞の直示用法の体系は、有標のコ系（近称）とカ系（遠称）の二項対立であり、無標（中立）のソ系は、専ら非直示領域（照応領域、観念指示領域など）で用いられていたと想定する。ここでは、ソ系において直示用法が非直示用法に後発するという意味変化の方向を想

⁷ なお、上代の方向代名詞として、指示代名詞に「ち」を付けたコ系「こち」、ソ系「そち」があるが、遠称カ系にはこのような言い方がなく、「をち」（「をと」）がこれを代用していた点が知られている。「をち」（「をと」）は、空間的に遠い所（及び、時間的に離れた時）を示す方向代名詞として用いられている（『日本国語大辞典』（第二版）参照）。以下は、遠称「をち」と近称「こち」が共起した「をちこち」の例、遠称「をても（彼面）」（「をちおも」の約）と近称「このも（此面）」（「このおも」の約）が共起した「をてもこのも」の例である（上代語の「をち」「をと」については、佐伯梅友（1950）、井出至（1960）、衣畑智秀（2021）などを参照）。

- (i) をちこちの（遠近） 磯の中なる 白玉を 人に知らえず 見むよしもがも
（万葉集・巻第七・1300）
- (ii) …海を恐み 行く船の 梶引き折りて をちこち（彼此）の 鳥は多けど…
（万葉集・巻第二・220）
- (iii) …あしひきの をてもこのも（乎氏母許乃毛）に 鳥網張り…
（万葉集・巻第十七・4011）

方向指示においては、ヲ系が使われていた点が注目されるが、ここでも、遠近の距離区分が反映されている点が重要である。

定しているが、Kinuhata and Hayashi (2018)、衣畑智秀 (2021) で示されている琉球諸語の指示体系、及び、そこから措定され得る琉球祖語の指示体系（直示二系列、照応一系の指示体系）を勘案するならば、ここでの想定は必ずしも奇

⁸ 『日本古典文学全集 8 萬葉集③』（頭注、199頁）は、次の歌の「その松が枝」のソ系は、「現場指示としての用法」とする。また、岡崎友子（2021：59）は、(i) のソ系は「話者がぎりぎり見える限界」を指示する「空間的指示で、可視の対象を示す」とする。

(i) 袖振らば 見つべき限り 我はあれど その松が枝に（其松枝） 隠らひにけり
（万葉集・卷第十一・2485）

ただし、この歌は、旅に出る夫と別れた際の状況を思い浮かべて詠んだ歌と解することもできる。その場合、ここでのソ系は、観念指示用法（記憶指示用法）として解釈されることになる。

では、次の例のソ系はどうであろうか。

(ii) 水鳥を越前判官大伴宿禰池主に贈る歌一首并せて短歌
天離る 鄙にしあれば そここ（彼所此間）も 同じ心そ 家離り 年の経
ぬれば うつせみは 物思繁し…
（万葉集・卷第十九・4189）

『新編日本古典文学全集 9 万葉集④』（頭注、316頁）では、「そこ」は相手池主、「ここ」は作者家持を指すと解されている。一方、この解釈には異論もある。清水功（1973：475）は、(ii) の「そこ（彼所）」は、「仮字書ではないがこの用例が上古文獻の中で管見に入った「相手の勢力範囲内のものを指すソ系現場指示語」の可能性の最も大なるもの」とする一方、ここでの「〔彼所此間毛〕は必ずしも「相手の所・自分の所」とすぐ断定できるわけではなく、「ドコモカシコモ」というような表現ととれなくはない」とし、「これとても必ずしもそのままソ系現場指示語とは断定できない」とする。私見では、(ii) の「そこ」を仮に受け手（相手）を指すと解した場合でも、受け手（相手）は、詠み手（自己）にとって不可視の対象であり、ここでのソ系は典型的な直示の要件（＝発話の現場に存在する（主として眼前の）対象を、指さしなどによって直接的に指し示す）（金水敏（2001））を欠く（澤田淳（2015）参照）。

万葉集中に受け手（相手）を指示するかに見えるソ系の例として、さらに以下のような例がある。

(iii) 百積の 船隠り入る 八占さし 母は問ふとも その名（其名）は告らじ
（万葉集・卷第十一・2407）

(iv) 明日の日は その門（其門）行かむ 出でて見よ 恋ひたる姿 あまた著けむ
（万葉集・卷第十二・2948）

これらのソ系が受け手（相手）、ないしは、受け手（相手）の近傍の対象を指すと解した場合でも、受け手（相手）は詠み手の眼前には存しない不可視の対象である。この点で、これらのソ系も典型的な直示の要件を欠く。

異な想定とはいえない（澤田淳（2024：154-155））¹⁰。

4. 聞き手領域指示の歴史

4.1. ソ系の直示用法

4.1.1. 中距離指示用法

ソ系において、話し手の眼前の対象を指し示す直示用法の確例が見られるようになるのは、中古の文献からである。次の例は、従者達が女主人の進む先を教導・注意喚起している場面であり、ここでのソ系は、中距離指示的な例といえる。藤本真理子（2008：48）も、「中距離指示として用いられているとも見られる古代語のソ系列」の例としてこの例を挙げる¹¹。

- (21) 内外ゆるされたる若き男ども、家の子など、あまた立ちつづきて、「そこもとは落ちたる所侍り。あがりたり」など教へ行く。

（枕草子・一一六・221頁）

中距離指示的なソ系の例としては、さらに、以下のような例が挙げられる。

- (22) 「しばし」といはせけれど、人の家に逃げて入りて、竈のしりへにかがまりをりける。この車より、「なほこの男、たづねて率て来」といひければ、ともの人、手をあかちて、もとめさわざけり。人、「そこなる家

⁹ ソ系の非直示用法（非現場指示用法）としては、照応用法以外に、(i) のような観念用法（記憶指示用法）や、(ii) のようなlogo(phoric) 指示用法（金水敏・岡崎友子・吉美庚（2002：232））などがある。

(i) ぬばたまの その夜（其夜）の梅を た忘れて 折らず来にけり 思ひしものを
を [観念指示用法]（万葉集・巻第三・392）

(ii) 逢はむ日を その日（其日）と知らず 常闇に いづれの日まで 我恋ひ居らむ
[logo(phoric) 指示用法]（万葉集・巻第十五・3742）

¹⁰ ソ系の歴史において、直示用法よりも照応用法が先行するとみなした場合、指示詞において、直示用法が基本的用法であり、照応用法を含む他の用法は直示用法からの派生用法であるとみなすDiessel（1999：110）の通言語的な仮説の妥当性についても見直す必要性が生じることになる。

¹¹ 岡崎友子（2010：94）では、「いわゆる中距離の対象を指示するソ系列も、かなり後の中世末期にしか確例を見いだすことができない」とされているが、本稿では、(21) - (24) のような例が存在することから、既に中古において中距離領域を指示するソ系の使用が認められるとみなしたい。

になむ侍りける」といへば、この男に、「かくおほせごとありて召すなり。なにの、うちひかせたまふべきにもあらず。物をこそたまはせむとすれ。をさなき者なり」といふ時に、硯を乞ひて文を書く。

(大和物語・百四八・379-380頁)

- (23) 「入らせたまへ。端あらはなり」と聞こえさすれば、「これを制せむと思ひて言ふ」とおぼえて、「それ、さばれ、もの恥づかしからず」とのたまへば、「あな心憂。そらごとと思しめすか。その立部のつらに、いと恥づかしげなる人、侍るなるを。奥にて御覧ぜよ」と言へば、「けらを、かしこに出で見て来」とのたまへば、立ち走りていきで、「まことに、侍るなりけり」と申せば、立ち走り、烏毛虫は袖に拾ひ入れて、走り入りたまひぬ。(堤中納言物語・虫めづる姫君・417頁)
- (24) まだこなたにて御髪などまゐるほど、「淑景舎は見たてまつりたりや」と問はせたまへば、「まだいかでか。御車よせの日、ただ御うしろばかりをなむはつかに」と聞ゆれば、「その柱と屏風とのもとに寄せて、わがうしろよりみそかに見よ。いとをかしげなる君ぞ」とのたまはするに、うれしく、ゆかしさまさりて、いつしかと思ふ。(枕草子・百・200頁)
- (25) かくいふ所は、明順の朝臣の家なりける。「そこもいざ見む」と言ひて、車寄せて下りぬ。(枕草子・九十五・185頁)

最後の(25)は、地の文と会話文を連続的なもの(cf.「移り詞」)と捉えた場合、「そこ」が「明順の朝臣の家」を照応的に指示していると解せる余地もあるが¹²、地の文と会話文を分けて捉えた場合、「そこ」は中距離指示的に解せる。

また、次のソ系は、指示対象(遣戸、御几帳)と聞き手の位置関係によっては聞き手領域指示的に解せる余地もあるが、中距離指示的な解釈もあり得るといえる。

- (26) 「心地はいとあし、この翁の近づきたるになむ、いとわびしき。その遣戸掛けこめて、な入れそ」とのたまへば、(落窪物語・卷之二・87頁)
- (27) 「宮のぼらせたまひたり」と案内申せば、「いづら、いづこ」などおぼせらるるは、むげに御耳も聞かせたまはぬにやと思ふに、心憂くおぼゆ。「その御几帳のもとに」と申せば、「いづら」と、御几帳のつまを引き

¹² たとえば、次の例の「そこ」は、地の文の先行文脈に現れる「二条院いと近き所」を指す照応用法の「そこ」と解釈され得る。

- (i) 御文いとこまやかに書きたまひて、二条院いと近き所を造らせたまふを、「そこになむ渡したてまつるべき。よろしき童べなど求めさぶらはせたまへ」など、人々の上まで思しやりつつ、とぶらひきこえたまへば、(源氏物語・蓬生・353頁)

上げさせたまへば、「ここに」と申させたまふ。

(讃岐典侍日記・410頁)

4.1.2. 聞き手領域指示用法

話し手の眼前に存する聞き手や聞き手の近傍の対象を指示するソ系の確例が見出されるようになるのも、中古の文献からである(金水敏・岡崎友子・曹美庚(2002)、李長波(2002)、藤本真理子(2008)、岡崎友子(2010)、澤田淳(2015)、澤田淳・多田知子・岡田純子(2023)など)。たとえば、以下のような例である¹³。

- (28) うちわたす遠方人にも申すわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも
(古今和歌集・巻第十九・1007)
- (29) 奥の人はいと静かにのどめて、「待ちたまへや。そこは持にこそあらめ、このわたりの劫をこそ」など言へど、
(源氏物語・空蟬・121頁)
- (30) 源氏「そこにこそ多く集へたまふらめ。すこし見ばや。(略)」
(源氏物語・帚木・56頁)
- (31) 昼つ方、小さき童、緑の薄様なる包文のおほきやかなるに、小さき鬚籠を小松につけたる、また、すすすくしき立文とりそへて、奥なく走り参る、女君に奉れば、宮、「それはいづくよりぞ」とのたまふ。
(源氏物語・浮舟・109頁)
- (32) きたなげなき女、いとをかしげなる子を抱きて、門のもとに立てり。この児の顔のいとをかしげなりければ、目をとどめて、「その子、こちらで来」といひければ、この女寄り来たり。
(大和物語・一六九・411-412頁)
- (33) 中納言の君の、忌日とて、くすしがり行ひたまひしを、「給へ、その数珠しばし。行ひしてめでたき身にならむと借る」とて、
(枕草子・百二十四・235頁)
- (34) 「いみじう、かたはらいたき事はせさせつるぞ。え聞かで、耳をふたぎでぞありつる。その衣一つ取らせて、とくやりてよ」と仰せらるれば、「こ

¹³ 以下は、手紙文(消息文)内で用いられたソ系の例であり、ここでのソ系は、話し手(書き手)の眼前には存しない不可視の聞き手(読み手)の近傍の対象を指す。

(i) 京より、母の御文持て来たり。

母君(中略)参り来まほしきを、少将の方の、なほいと心もとなげに、物の怪だちてなやみはべれば、片時も立ち去ることといみじく言はれはべりてなむ。その近き寺にも御誦経せさせたまへ。
(源氏物語・浮舟・195頁)

- れ、給はするぞ。衣すすけためり。白くて着よ」とて、投げ取らせたれば、
(枕草子・八三・153頁)
- (35) 局へいととく下るれば、侍の長なる者、袖の葉のごとくなる宿直衣の袖の上に、青き紙の、松につけたるを置きて、わななき出でたり。「それはいつこのぞ」と問へば、「齋院より」と言ふに、ふとめでたうおぼえて、取りてまゐりぬ。
(枕草子・八三・158頁)
- (36) 職の御曹司の西面の立部のもとにて、頭弁、物をいと久しう言ひ立ちたまへれば、さし出でて、「それは誰ぞ」と言へば、「弁候ふなり」とのたまふ。
(枕草子・四七・104頁)
- (37) 「御返り、はや聞こえたまへ」とあれど、いらへもしたまはず。大臣、「その文しばし」とせめてのたまへば、「何のゆかしう思すならむ」とて、さし出だしたまへば、
(落窪物語・巻之四・314頁)
- (38) むすめ、「など、かくはのたまふぞ」と言へば、「その御顔は、いかになりたまふぞ」とも、え言ひやらず。
(堤中納言物語・497頁)
- (39) さて、この男、その年の秋、西の京極、九条のほどにいきけり。そのあたりに、築地など崩れたるが、さすがに葺など上げて、簾かけ渡してある人の家あり。簾のもとに、女どもあまた見えければ、この男、ただにも過ぎで、「などかその庭は心すごげに荒れたる」などいひ入れたれば、「誰ぞ、かういふは」など問ひければ、「なほ、道ゆく人ぞ」といひ入る。
(平中物語・三十六・522頁)
- (40) 「(略) いとはしたなき心地するに、そのおはするところに据ゑたまへ。よも、さきざき見たまふらむ人のやうにはあらじ」とのたまへば、
(和泉式部日記・21頁)
- (41) 見れば、大貳の三位、うしろのかた抱きまゐらせて、大臣殿の三位、ありつるままに添ひ臥しまゐらせられたり。御あとのかたについゐたれば、大貳の三位、「苦しうせさせたまへば申しつるぞ。その御足とらへまゐらせたまへ」とあれば、とらへまゐらせむたり。
(讃岐典侍日記・414頁)
- (42) 「ただ今は、この御堂の夫を類に召すことこそは、人は堪へがたげに申すめれ。それはさは聞きたまはぬか」と言ふめれば、
(大鏡・353頁)
- (43) 東宮、「それは、今のことにこそあなれ。ここには、そこにこそただ今聞こゆれ、かしこに聞こえて、久しき心地なむする」
(うつほ物語・菊の宴・22頁)
- (44) 男家ニ死人ヲ持テ行タレバ、妻此ヲ見テ、「其レハ何ゾ」ト云ヘバ、男、「然々ノ事ニテ、此ク思テ持来ル也」ト云テ、泣ク事無限シ。
(今昔物語集・巻第十六・二十九・264-265頁)

- (45) 「それはさこそおぼすらめども、おのれは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。(略)」
(徒然草・一四一・196頁)
- (46) 猫間殿は合子のいぶせさに召さざりければ、「それは義仲が精進合子ぞ」。中納言召さでもさすがあしかるべければ、箸とて召すよししけり。
(平家物語・巻第八・127頁)
- (47) 白泡かませ、舎人あまたついたりけれども、なほひきもためず、をどらせて出できたり。梶原源太うち寄って、「それはたが御馬ぞ」。「佐々木殿の御馬候」。
(平家物語・巻第九・162頁)
- (48) 「矢おもての雑人原、そこのき候へ」とて、さしつめひきつめさんごんに射給へば、やにはに鎧武者十余騎ばかり射おとさる。
(平家物語・巻第十一・353頁)
- (49) 「あれはいづくよりぞ」と御たづねあれば、「閻魔の庁より、平家太政入道殿の御迎に参つて候」と申す。「さて其札は何といふ札ぞ」と問はせ給へば、
(平家物語・巻第六・450頁)
- (50) 「その太刀とり寄せよ」とて見給へば、藏人の太刀は一所もきれず、常陸房が太刀は四十二所きれたりけり。(平家物語・巻第十二・483頁)

4.2. カ系・ア系の直示用法

以下の例のカ系・ア系は、話し手（及び、聞き手）から遠くにある対象を指示している。この点で、現代語のア系と同様の使い方といえる。

- (51) 火櫃に煙の立ちければ、「かれは何ぞと見よ」と仰せられければ、見て帰りまゐりて、
(枕草子・一七五・305頁)
- (52) 芥河といふ河を率ていきければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。
(伊勢物語・六・117-118頁)
- (53) 殿、端の方より御覧じ出だして、「あれは誰そや。かの御簾の間より見ゆるは」ととがめさせたまふに、「少納言が物ゆかしがりに侍るならむ」と申させたまへば、
(枕草子・六・36頁)
- (54) 長谷に参りける女車の、前の簾をうちかづきてゐたる児の、いと美しげなるが、「あの男の持ちたる物は何ぞ。かれ乞ひて我に賜べ」と、馬に乗りて供にある侍にひければ（宇治拾遺物語・巻第七・五・237頁）
- (55) 家隆の子息の禪師隆尊、坂東こかしこ修行して、ある地頭の家の前栽の桜の花を、一枝折りて逃げけるを、主見つけて、「あの法師捕へよ」と、ことごとしく、ののしりければ、（沙石集・巻第五末ノ二・261頁）
- (56) 「あれはいかに」と見る程に、舟のうちよりよはひ十八九ばかりなる女

房の、まことに優にうつくしきが、柳の五衣に紅の袴着て、みな紅の
扇の日いだしたるを、舟のせがいはさみたてて、陸へむいてぞまね
いたる。
(平家物語・巻第十一・356-357頁)

現代語のア系には見られない古典語のカ系・ア系の用法として注目されるのが、話し手の眼前に存する聞き手や聞き手の近傍の対象を指す用法である（清水功（1973）、片岡了（1973）、山口堯二（1990）、井出至（1991）、迫野虔徳（2012）、金水敏・岡崎友子・曹美庚（2002）、李長波（2002）、藤本真理子（2009、2016）、金水敏（2010、2015、2018）、岡崎友子（2010）、澤田淳（2015）など）。金水敏（2018）は次のように述べている。

- (57) 現代共通語との違いで重要なのは、聞き手領域が体系的に印づけられているかどうかである。中古からソ系で聞き手や聞き手近辺の対象を指示する用法は認められるが、問題はア系・カ系でも聞き手および聞き手近辺の対象が指し示される例が中世前期まで認められることである。これは、遠称ア系で聞き手や聞き手近辺を指し示せない現代共通語との大きな相違点である。現代共通語と同じ体系は中世後期の話し言葉資料から認められるので、このあたりで直示の体系が大きく転換したと推定できる。
(金水敏（2018：728）)

清水功（1959：58）は、万葉集中の（8）の歌の「誰そ彼（誰彼）」は、「自問や、傍らのものをかえり見て発した質問ではなくて、「露にぬれつつ」待つ当の相手に（即ちこの歌の作者に）発せられた諧謔味をこめた言葉であると解した方が自然ではあるまいか」とし、ここでの「彼」が「[相手]」をさす「か」系指示詞」と解釈できる可能性を指摘している（ここでの「誰そ彼（誰彼）」は、「直接受け手に向けて受け手を対象として発せられたもので、現代語では「あの人は誰」と言うより「あなたは誰」という言い方に近いと考えられる」とする迫野虔徳（2012：221）の論も参照¹⁴⁾）。異論もあるが、仮にこの解釈に沿うならば、カ系の聞き手領域指示的な用例は、中古以前から認められることになる。

以下に、中古から中世の文献に見られる話し手の眼前に存する聞き手や聞き手の近傍の対象を指示するカ系・ア系（以下、「聞き手領域指示的なカ系・ア系」）の例を挙げる。

¹⁴ ただし、迫野虔徳（2012：221）では、（9）の歌の「誰そ彼（誰彼）」についても、「直接受け手に向けて受け手を対象として発せられたもの」と解されており、この点は清水功（1959）と異なる。

- (58) 『あののをこ、こち寄れ』と召しければ、かしこまりて高欄のつらに参りたりければ、
(更級日記・284頁)
- (59) なま老いたる女法師のいみじうすすけたる衣を着て、さるさまにて言ふなりけり。「かれは、何事言ふぞ」と言へば、声ひきつくりひて、「仏の御弟子に候へば、御仏供のおろし給べむと申すを、この御坊たちのをしみたまふ」と言ふ。
(枕草子・八三・151頁)
- (60) まづ咳を先にたてて、「かれは誰ぞ。何人ぞ」と問ふ。名のりして、「侍従の君と聞こえし人に対面たまはらむ」と言ふ。
(源氏物語・蓬生・346頁)
- (61) 戸をやをら押し開くるに、老いたる御達の声にて、「あれは誰ぞ」とおどろおどろしく問ふ。わづらはしくて、「まろぞ」と答ふ。
(源氏物語・空蟬・127頁)
- (62) 大将のおとど、「いづくよりぞや。いと艶ある文かな」。中納言、「梨壺のよりなり」。父おとど、「いかで、かれ見むや」とのたまひて、見たまひて、
(うつほ物語・蔵開上・379頁)
- (63) 仲忠、「かれは誰ぞ」といふ。「涼」といらへていふ。
(うつほ物語・内侍のかみ・216頁)
- (64) 「あの男、しばし候へ。御旅籠馬など参りたらんに、物など食ひてまかれ」といへば、「承りぬ」とてゐたる程に、旅籠馬、皮籠馬など来着きたり。
(宇治拾遺物語・巻第七・五・239頁)
- (65) 大垣の方より声ばかりして、「あの過ぐる人まかり止れ。公達のおはしますぞ。え過ぎじ」といひければ、「さればこそ」と思ひて、すすどく歩みて過ぐるを、
(宇治拾遺物語・巻第十一・八・348頁)
- (66) 中納言、「あれは何する僧ぞ」と尋ねらるるに、殊の外に声をあはれげになして、「(略) 煩惱を切り捨てて、ひとへにこの度生死の境を出でなと思ひ取りたる聖人に候ふ」といふ。
(宇治拾遺物語・巻第一・六・35-36頁)
- (67) 「あれは誰ぞ」と問はせ給へば、「この主に候ふ翁なり」と申す。
(宇治拾遺物語・巻第十二・十五・380頁)
- (68) 「あれは誰ぞ」と問ひければ、「おのれは五条西洞院の辺に候ふ翁に候ふ」と答へければ、
(宇治拾遺物語・巻第一・一・25頁)
- (69) 僧正、「かれは何者ぞ」と問ひけり。男片膝をつきて、「わび人に侍り。(略)」といふまに、
(宇治拾遺物語・巻第十四・二・432頁)
- (70) 賀茂の臨時の祭の還立に御神樂のあるに、行綱、家綱にいふやう、「人長召したてん時、竹台のもとに寄りてそそめかんずるに、『あれはなんする者ぞ』と、囃い給へ。その時、『竹豹ぞ、竹豹ぞ』といひて、豹の

まねを尽さん」といひければ、家綱、「ことにもあらず、てのきは囃さん」と事うけしつ。さて人長立ち進みて、「行綱召す」といふ時に、行綱やをら立ちて、竹の台のもとに寄りて、這ひありきて、「あれは何するぞや」といはば、それにつきて、「竹豹」といはんと待つ程に、家綱、「かれはなんぞの竹豹ぞ」と問ひければ、詮にいはんと思ふ竹豹を先にいはれければ、いふべき事なくて、ふと逃げて走り入りにけり。

(宇治拾遺物語・巻第五・五・179頁)

- (71) 事沙汰する人、「彼は敏行か」と問へば、「さに侍り」と、この付きたる者答ふ。(宇治拾遺物語・巻第八・四・262頁)¹⁵

- (72) 「彼ノ男、此參レ」ト召ス。(今昔物語集・巻第十九・二・562頁)

- (73) 此ノ男ヲ見テ立留テ云ク、「彼ノ返リ給フ主、何ゾ歎タル気色ニテハ」ト。
(今昔物語集・巻第十六・十八・220頁)

- (74) 院、「あれハ何二人ニゾ」ト問セ給ケレバ、「此ノ家ノ主ニ候フ翁也」ト申ケレバ、
(今昔物語集・巻第二十七・二・26頁)

- (75) 女ノ喘タキテ走ルヲ見テ、「彼レハ何ド走ルゾ」ト問ケレバ、女、「然々ノ事ノ侍テ逃ル也」ト云ケレバ、
(今昔物語集・巻第二十九・二十九・383頁)

- (76) 客僧、驚いて、内へつと入りて、見れば、一間なる処に、火鉢に火置きて、紺紙に金泥にて書きたる経、取り散らして居たる者あり。「あれはいかに」と問へば、申しけるは、「日来しつる事の積もりて、口惜しき事にあひ侍り。(略)」とて悲しみ泣く。

(沙石集・巻第九ノ十七・476頁)

- (77) さて山上に詣でて、恐れもあれば、御殿より遙かなる木の本にて念誦し、法施奉るに、折節かむなぎ神憑きて舞ひ踊りけるが、走り出て、「あの御房はいかに」とて来りけり。
(沙石集・巻第一ノ四・35頁)

- (78) 新大納言けしきかはりて、さつとたたれけるが、御前に候ひける瓶子を、狩衣の袖にかけて、引倒されたりけるを、法皇、「あれはいかに」と仰せければ、大納言立帰つて、「平氏たはれ候ひぬ」とぞ申されける。

(平家物語・巻第一・72頁)

- (79) 「あれはいづくよりぞ」と御たづねあれば、「閻魔の庁より、平家太政入道殿の御迎に参つて候」と申す。
(平家物語・巻第六・450頁)

- (80) 武蔵房弁慶、老翁を一人具して参りたり。御曹司、「あれは何者ぞ」と問ひ給へば、「此山の獵師で候」と申す。
(平家物語・巻第九・204頁)

- (81) 熊谷これを見て、「いかに、あれは越中次郎兵衛とこそ見れ。敵にはど

¹⁵ ここでの「彼」は、聞き手の近傍にいる人物を指す。

- こをきらふぞ。直実におしならべてくめやくめ」といひけれども、「さもさうず」とてひっかへす。
(平家物語・巻第九・211-212頁)
- (82) 人多く群集したり。其中に法師の頸を、一つさしあげたり。「さてあのくびはいかに」と問ひ給へば、「是は平家太政入道殿の御頸を、悪行超過し給へるによって、当社大明神の、召しとらせ給ひて候」と申すと覚えて夢うちさめ、
(平家物語・巻第二・232頁)
- (83) 中納言の侍清衛門公長といふ者馳せ来って、「あれは備中守殿の御舟とこそ見参らせ候へ。参り候はん」と申しければ、舟を汀にさし寄せたり。
(平家物語・巻第九・240-241頁)
- (84) 女院はこの御有様を御覧じて、御焼石、御硯、左右の御ふところに入れて、海へいらせ給ひたりけるを、渡辺党に源五右馬允昵誰とは知り奉らねども、御ぐしを熊手にかけてひきあげ奉る。女房達、「あなあさまし。あれは女院にてわたらせ給ふぞ」と、声々口々に申されければ、判官に申して、いそぎ御所の御舟へわたし奉る。
(平家物語・巻第十一・383-384頁)
- (85) さて武士ども内侍所の鎖ねぢきって、すでに御蓋をひらかんとすれば、たちまちに目くれ鼻血たる。平大納言いけどりにせられておはしけるが、「あれは内侍所のわたらせ給ふぞ。凡夫は見奉らぬ事ぞ」と宣へば、兵共みなのにけり。
(平家物語・巻第十一・384頁)
- (86) 蔵人、「あの僧。や、それはあらぬぞ。行家はここにあり」と宣へば、
(平家物語・巻第十二・482頁)
- (87) 悪源太、「あの雑人ども、退き候へ。西を拝みて、念仏申さん」と宣へば、左右へざつと退きにけり。
(平治物語・535頁)
- (88) 門の口にたたずみければ、内より、「あれは誰ぞ」と問ふ。「平家の侍、難波三郎経房と申す者にて候ふ」
(平治物語・560頁)
- (89) 判官、「あはや土佐が後ろより入りける」とて、矢差し矧げて、馬打ち寄せ、「あれに通る法師誰ぞ、名乗れ、名乗らで過ちせられ候ふな」と仰せられけれども、
(義経記・巻第四・191頁)

次の例では、1文目の若君（兄）から従者への発話中に現われる「彼ノ男」は遠方にいる男を指しており、2文目の従者から男への発話中に現われる「彼ノ男」は聞き手である男を指している¹⁶。

- (90) 兄ノ云ク、「彼ノ男、其ノ持タル物ハ何ゾ。其レ乞テ得セヨ」ト。馬ニ乗テアル侍来テ云ク、「彼ノ男、其ノ持タル物若君ノ召スニ、奉レ」ト。
(今昔物語集・巻第十六・二八・256頁)

さて、カ系・ア系で聞き手を指す現象について、橋本四郎 (1982:237) は、「呼びかけの対象としてみれば、中称的領域にある。それをアで指すのは、対象を聞き手として言語場へ引き入れる以前の段階における指示であるためと考えられる」と述べている¹⁷。一方、追野虎徳 (2012:225) は、橋本四郎 (1982) では「ひとりごと (独語) が持つものに近い場を想定しておられるように解される」が、「話し手の対象把握如何にかかわらず、この場合同時に聞き手でもある対象に向かって「問いかけ」ているということは疑いのないことのように思われる」とし、「詠嘆、感動あるいは疑い (自問) のような話し手の内部にとどまるだけのものではなく、正体不明の相手にむかって積極的に働きかけていると解した方が自然である」とする反論を提示している。聞き手領域指示的なカ系・ア系が正体不明の相手を誰何する場面で用いられるとする観察は、他の先行研究でも提示されている。清水功 (1973:476) は、カ系・ア系で聞き手を指す場面は、「相手の名や素性が不明であることが多い」とし、片岡了 (1973:46) も、聞き手を指す「あれ」はそのほとんどが相手を不明のものとして誰何する表現にしか現れない」とした上で、「聞き手をそれと確定した内容ではない」とする。藤本真理子 (2009:134) も、問題のカ・ア系は、「情報が不確定な対象を指示する場合に用いられる」とする (藤本真理子 (2016) も参照)。

確かに、聞き手領域指示的なカ系・ア系は、「かれ／あれ は誰ぞ」などのよ

¹⁶ なお、(90) の一文目の「其レ乞テ得セヨ」の「其レ」は、照応用法 (文脈指示用法) といえる。ここでは、話し手の眼前の対象 (男が持っている物) が照応用法 (文脈指示用法) のソ系で指示されていることから、「直示優先の原則」 (金水敏 (1999)) が働いていない。古典語では、「直示優先の原則」が働いていなかったか、その適用が現代語よりも弱かったものと考えられる (金水敏 (1999:88) も参照)。なお、英語でも、談話に登場した既出の対象であれば、たとえその対象が話し手の眼前にあっても照応的に指示できることから、「直示優先の原則」は適用されない。たとえば、次の例のthatは、既出のthis brown sweaterを先行詞とする前方照応用法と解釈され得る。

(i) I'm not going to wear this brown sweater any more. I hate that colour.

(Carter and McCarthy (2006:370))

¹⁷ 山口堯二 (1990:162) にも、「現場で知覚された人物やその周辺の対象でも、その聞手を相手とする対話の場がまだできていない状態で呼びかけ話しかけるような場合、古くはカ系・ア系が用いられた。しかし、現代語では対話の場が特にできていなくても、ソ系が用いられるようになってきている」や、「聞手および聞周辺の現場指示にも、対話の場をこれから作ろうとするような場合、古くカ系・ア系が用いられたが、まだ対話の場ができていない人物は、それを聞手とする場合でさえ相手らしくは扱われなかったことを示す」といった指摘が見られる。

うに、疑問詞とともに用いられる例が多い。「正体が不明の対象（人物）を誰何する」（迫野虎徳（2012：227））という特徴は、遠称の指示形式が有する対象に対する（心理的）遠隔意識とも整合する（藤本真理子（2009）も参照）。また、上代文献（万葉集）の「誰そ彼」（（8）参照）との繋がりも想起されるところである（清水功（1959）、迫野虎徳（2012））。

一方で、このような聞き手領域指示的なカ系・ア系は、（85）の「あれは内侍所のわたらせ給ふぞ」などのように、「正体が不明の対象（人物）を誰何する」以外の場面でも使われ得る点は留意される¹⁸。「正体が不明の対象（人物）を誰何する」場面は、聞き手領域指示的なカ系・ア系が使われる唯一の場面ではなく、それが使われる最も典型的な場面であるとするほうが使用の実態に即していよう。

さらに、聞き手領域指示的なカ・ア系の指示対象について、迫野虎徳（2012：226-227）は、「この特殊用法は、まず「人」を指し示す場合に限られていると見てよい」とするが、（82）の「さてあのくびはいかに」（平家物語・巻第二・232頁）や、（83）の「あれは備中守殿の御舟とこそ見参らせ候へ」（平家物語・巻第九・240-241頁）などのように、（厳密には）「人」（聞き手）ではなく、「物」（聞き手領域内の対象）を指し示している例も見られる。聞き手領域指示的なカ系・ア系の指示対象の範囲も迫野虎徳（2012）の想定より広いといえる。

さて、カ系・ア系の聞き手領域指示的運用は、話し手から「遠い」という（聞き手の存在には影響を受けない）距離区分を反映した運用ではなく、聞き手領域を二次的にマークする（聞き手の存在に影響を受ける）人称区分を反映した運用であるといえる。この点を、次の例をもとに確認しておこう（小田勝（2015：625）も参照）。光源氏と朧月夜の密会現場に朧月夜の父、右大臣が遭遇する場面である。右大臣は、娘の衣に薄二藍の男帯が絡まっているのを見ていぶかしんでいるところ、さらに娘の近傍の御几帳の下に懐紙が落ちているのに気づく。

- （91）薄二藍なる帯の御衣にまづはれて引き出でられたるを見つけたまひてあやしと思すに、また畳紙の手習などしたる、御几帳のもとに落ちたりけり。これはいかなる物どもぞと御心おどろかれて、右大臣「かれは誰がぞ。けしき異なる物のさまかな。たまへ。それ取りて誰かぞと見はべらむ」とのたまふにぞ、うち見返りて、我も見つけたまへる。

¹⁸ さらに、聞き手領域指示的なソ系が「正体が不明の対象」を指示する次のような例もある。

（i）男家ニ死人ヲ持テ行タレバ、妻此ヲ見テ、「其レハ何ゾ」ト云ヘバ、男、「然々ノ事ニテ、此ク思テ持来ル也」ト云テ、泣ク事無限シ。

（今昔物語集・巻第十六・二十九・264-265頁）

聞き手（娘）の近傍にある対象（「畳紙の手習などしたる」）が、同一発話中で、カ系「かれ」とソ系「それ」の両方で指示されている（ただし、ここでの「それ」は、照応用法（文脈指示用法）の可能性もある）。ここでは、「かれ／それ」の指示対象が直前の右大臣の心内発話では、「これはいかなる物どもぞ」とコ系で指示されている点に注目したい。独話では「近い」と判断され、コ系で指示されていた対象が、対話ではカ系で指示されている事実は、ここでのカ系の使用が聞き手の存在に影響を受けた人称区分を反映したものであることを示唆する（澤田淳（2015：80-81））。

以上のように、古典語のカ系・ア系は、（距離区分を反映した）話し手から遠方領域（話し手・遠）の対象を指示することに加えて（(51)-(56) 参照）、（人称区分を反映した）聞き手領域（聞き手・近）の対象を指示することもできるが（(58)-(89) 参照）、これは、英語のthat（及び、場所指示詞there）と相似的であるといえる。たとえば、次の(92)のthatは、話し手から遠方領域（話し手・遠）の対象を指し示しており、(93)のthatは、聞き手領域（聞き手・近）の対象を指し示している。

(92) Could I see that video on the shelf up there?

(Carter and McCarthy (2006 : 179))

(93) What's that red mark on your face?

(Carter and McCarthy (2006 : 369))

次の例では、指示対象の料理は、話し手の近傍にあるものの、聞き手が手を伸ばして取ろうとしている対象であるため、thatで指示されている。

(94) (姉が目の前に置かれている自分の料理を横から取ろうとする弟を注意する場面)

Hey! That's mine! (Tony Rubino and Gary Markstein, *Daddy's Home*.)

(<http://www.gocomics.com/daddyshome/2008/06/11>)

英語は、聞き手領域を印づける「第三の指示詞」を持たないため、人称区分のシステムは日本語（現代語）ほど明瞭ではないが、聞き手がない時にはthisで指示される対象（すなわち、話し手からごく近距離にある対象）でも、聞き手が手に触れるなど、聞き手のコントロール下にある場合には、（その対象は話し手の領域外の対象とみなされ）thatが使える。このとき、thatは、二次的に聞き手

領域指示の標識として機能する(澤田淳(2013))¹⁹。

英語のthat (there)と同様のことが古典語のカ系・ア系にも当てはまるといえる。すなわち、古典語のカ系・ア系は、本来の遠称領域指示の機能を、二次的に聞き手領域指示として利用しているといえるのである。中世後期以降、聞き手

¹⁹ 英語では、聞き手領域の対象がthisで指示されることもある(澤田淳(2013))。

(i) ライナス:(チャーリー・ブラウンが手にしているものを見て) What's this? (なんだい、それ?) (『SNOOPY① 行くよ! 今行くよ!』66頁)

(ii) ルーシー: Surprise! (びっくりでしょ!)

シュローダー:(ルーシーが手にしているものを見て) What's this? (何それ?) (『SNOOPY② みんなそろったかい?』110頁)

なお、古典語でも、聞き手や聞き手の近傍の対象をコ系で指示する例が見られる(澤田淳(2015))。

(iii) いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。女、恐ろしと思へる気色にて、女「あなむくつけ。こは誰そ」とのたまへど、 (源氏物語・花宴・356)

(iv) 走りつきて、白き紙に包みたる物を差し上げて持て来。馬を控へて待てば、ありつる宿に通ひしつる郎等なり。「これは何ぞ」と問へば、「これ、郡司の参らせよと候ふ物にて候ふ。(略)」といへば、「いで、何ぞ」とて取りて見れば、松茸を包み集めたるやうにてある物、九つあり。

(宇治拾遺物語・巻第九・一・274頁)

(v) おりつに閑居ゑて、下る舟を探す程に、「この舟を寄せよ」といへども、玄光、聞かぬ由にて、下しければ、「悪い法師かな」とて、矢を取つて番ひて放ちければ、舷に射立てたり。 (平治物語・521頁)

(vi) 山のあるじ、大きにおどろきて、「これは、何ぞの人ぞ」。俊蔭答ふ、「清原の俊蔭、参り来つることは、しかじかのたまはせしかばなむ」。

(うつほ物語・俊蔭・32頁)

最後の「これ」は聞き手を指すが、うつほ物語では、以下のように、同様の場面で、「かれ」や「汝」を用いた例も見られる。

(vii) 三人の人、問ひていはく、「かれは、何ぞの人ぞ」。俊蔭答ふ、「日本国の王の使、清原の俊蔭なり。ありしやうは、かうかう」といふときに、

(うつほ物語・俊蔭・22頁)

(viii) 阿修羅、大きにおどろきていはく、「汝は何ぞの人ぞ」。俊蔭答ふ、「日本国王の使、清原の俊蔭。この山を尋ぬること、三年になりぬ。今日をもちてなむこの山を尋ね得たる」。

(うつほ物語・俊蔭・24頁)

話し手が聞き手や聞き手の近傍の対象を心理的に近くに引き寄せることで、コ系による指示が可能となっているといえる。

領域指示的なカ系・ア系は、聞き手領域を専用的に指し示すソ系によって駆逐されていくことになる。その要因の1つとして、カ系・ア系においては、聞き手領域指示が二次的な機能に過ぎなかったという点が考えられよう²⁰。

4.3. 聞き手領域指示の歴史的変遷

清水功（1959：54）は、カ・ア系の聞き手領域指示的な用例は、「室町期には急に少くなり、近世ではほとんど見られないようである」とし、「平家物語の用例についても、天草本では、「それ」といいかえたり、「あれは」を削ったりしているのは、もうこの用法を不安定なものと感じ初めている為でもあろうか。この用法の下限は大体鎌倉室町期としてよいのではないかと思う」と述べている。この指摘を踏まえて、次の平家物語の例を見てみよう。頼朝（兵衛佐）が、伊豆に配流されてきた僧侶（もとは北面の武士）である文覚に、清盛との争いに敗れた亡き父、義朝の髑髏と称する骨を見せられ、平氏追討の旗揚げを勧められる場面である。ここでは、頼朝（兵衛佐）は、聞き手の文覚が手にする髑髏を「あれ」で指示している。

- (95) ふところより白いぬのにつつんだる髑髏を一つとりいだす。兵衛佐、「あれはいかに」と宣へば、「これこそわたのの父故左馬頭殿のかうべよ。
(略)」
(平家物語・巻第五・390-391頁)

天草版平家物語（1592年刊）の同じ場面では、頼朝は文覚が手にする髑髏を「それ」で指示している（金水敏・岡崎友子・曹美庚（2002：233）参照）。

- (96) 白いぬので包んだ髑髏を一つ取り出いたれば、頼朝それわ何ぞと問わるに、これこそをん身の父佐馬頭殿の頭でござれ。
(天草版平家物語・巻第二・第九・301頁)

近世期の狂言台本、謡曲、浄瑠璃などでは、「あれに」や「あれなる」といっ

²⁰ 詳細な調査は今後の課題となるが、ソ系と異なり、カ系・ア系には、話し手の眼前に存しない不可視の聞き手や聞き手の近傍の対象を指す用法は見出し難い。また、聞き手領域指示的なカ系・ア系は、ノ形（例：「かの」「あの」）やレ形（例：「かれ」「あれ」）（者・物の指示）に偏るようである。カ・ア系の聞き手領域指示用法は、ソ系の聞き手領域指示用法よりも使用範囲（生起環境）が限定的であったと考えられ、このことも、カ・ア系の聞き手領域指示用法の衰退の一要因（すなわち、ソ系によって駆逐される一要因）となった可能性がある。

た慣用化した表現の中で、聞き手を指すア系の用例が見られる（清水功（1959：54）、藤本真理子（2016：103-107）も参照）。

- (97) ^(大名)「中 / \ あれにハどちへ行ぞ「どれへと申事もござらぬ、方々に
旦那衆がござるに依て、よばせらるるかたへ参る
(大蔵虎明狂言集・上・うつぼざる・276頁)
- (98) ^(大名)「してあれにハしやうばいをするよなふ ^(昆布売)「中 / \ しやうば
い人でござる
(大蔵虎明狂言集・上・こぶうり・303頁)
- (99) ^(太郎冠者)「いつれそのやうなものじやが、あれにハさてちと煩がよくハ
でハせひで、何としてひつこふでいたぞ
(大蔵虎明狂言集・上・ぶあく・325頁)
- (100) ワキ「(略) 不思議やなこの所は、(ツレへ向き) 女人結界とこそ承りて
候ふに、あれなる女人は何とて参られて候ふぞ。
(謡曲集・竹生島・72頁)
- (101) シテ「なうなうあれなる御僧、今の歌をば何と思ひ寄りて口ずさび給
ひ候ふぞ。
(謡曲集・江口・276頁)
- (102) シテ「なうなうあれなる山伏はいづかたへ御通り候ふぞ。ワキ「こな
たの事にて候ふか、御身はいかなる人やらん。
(謡曲集・葛城・501頁)
- (103) なう / \ あれなる御僧、我が殿御返してたべ。いづくへ連れて行くこ
とぞ。
(近松門左衛門集・五十年忌歌念仏・44頁)

次のように、戯作作品の中でも、聞き手領域指示的なア系の使用が見られることがあるが（(104)の「あの子」は、「そこの子」の意を表し、呼びかけ語として使われている）、用例は限られる（清水功（1980：16）参照）²¹。

- (104) ばゞ「インネ、馬士じやアおざんない。となりのかごやの子でおざる

²¹ 聞き手を指すア系「あなた」の用例は、宝暦（1751-1764）頃から見られ（『日本国語大辞典』（第二版）参照）、「あなた」（及び、「あなた」が変化した「あんた」）は二人称代名詞としての地位を確立していく（人称詞「あなた」の成立については、山中梓（2025）などを参照）。

(i) 𠄎ときに貴さまに一生のたのみがある。きいてくれまいか 𠄎江あなたの事なら
なんでもききませう
(洒落本・箱まくら（1822年、上方）・131頁)

対称代名詞「あなた（あんた）」が聞き手領域指示的なア系の流れを汲むといえるのか否かについては今後の課題としたい。

は 弥二 「ハアそふか。コウあの子、団子がふたつあまつた。ソレく
いな かごやのこ 「うらアやアだ 弥二 「ナゼいやだ

(東海道中膝栗毛・二編下・120頁)

聞き手領域指示的なア系は、近世期以降も(限定された環境の中で)細々と生き延びていたものといえるが、聞き手領域指示としてはソ系が優位となり、ア系は聞き手領域から追い出されていくことになる。

さて、金水敏(2015:7)は、「平安時代(9～12世紀)から、「そこ」を中心に、聞き手および聞き手の近傍をソ系指示詞で指し示すことはあった」が、「一方で、遠称指示詞であるカ系、ア系(「かしこ」を除く)で聞き手および聞き手の近傍を指し示すことも行われた」点から、「この時点(本稿筆者注:平安時代の時点)でソ系列と聞き手とが意味論的に結びついたとは言えないし、指示詞によって「聞き手領域」が標識付けされてもいない」とし、「遠称指示詞が聞き手の近傍を指せなくなった(「-聞き手」)時点で、それは完成するのであり、文献ではおそらく中世後期(16世紀)以降のことかと考えられる」と指摘している。藤本真理子(2016:108)も、「中古からソ系列と結びつきはじめた〈聞き手領域〉の指示において、ソ系列の指示詞が聞き手領域指示の用法を確立したと述べるためには、ア系列の指示詞が聞き手および聞き手の近くにあるものを指せなくなる、すなわちア系列が〈聞き手領域〉に関わる指示から排除されている必要があった」と述べている。

ただし、ソ系における聞き手領域指示用法の確立(ないしは、ソ系と聞き手との意味論的な結びつき)が、カ系・ア系が聞き手や聞き手の近傍を指せなくなるまで待たねばならないのかは必ずしも自明ではない。聞き手領域指示からのカ系・ア系の排除とは独立して、ソ系が聞き手領域指示用法を確立させていた可能性もあるからである。

この可能性は、他言語の報告事例からも間接的に支持され得るといえる。一例として、Levinson(2004、2018、2022)で報告されているパプアニューギニアのロッセル島で話されているイエリ・ダニエ語(Yéli Dnye)(孤立言語)の指示詞を見てみよう。次の表は、イエリ・ダニエ語の空間指示詞(直示用法)の体系を示した表である。

表 1：イエリ・ダニエ語の空間指示詞の体系 (Levinson (2022 : 101))

	Speaker-Based	Addressee-Based
Proximal	<i>ala</i>	<i>ye</i>
Medial (Neutral)	<i>kî</i>	-
Distal	<i>mu</i> (far from Spkr)	

イエリ・ダニエ語には、「話し手基準」(speaker-based)の指示詞として、*ala* (話し手から近距離)、*kî* (話し手から中距離 (中立))、*mu* (話し手から遠距離)の3つがあり、「聞き手基準」(addressee-based)の指示詞として、*ye* (聞き手から近距離)がある。イエリ・ダニエ語には、聞き手領域指示専用の指示形式*ye*が存在するが、Levinson (2018 : 324, 2022 : 102)によれば、聞き手の近傍の対象は、遠称の指示形式*mu*でも指し示され得るという。たとえば、次の図2に示すような長テーブル上にある複数の対象(コップ)のうち、話し手から遠くかつ聞き手に近い対象(コップ)は、*ye* (聞き手から近距離)で指示することも、*mu* (話し手から遠距離)で指示することもできるとされる。

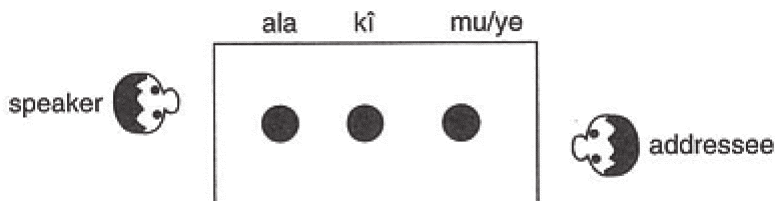


図 2：イエリ・ダニエ語の空間指示詞の選択 (Levinson (2018 : 324))

イエリ・ダニエ語では、遠称の指示形式*mu*が聞き手の近傍の対象を指示することが可能である(すなわち、遠称の指示形式*mu*が聞き手領域に関わる指示から排除されていない)にもかかわらず、*ye*が聞き手の近傍の対象を指示する形式として確立している点が注目される²²。古典日本語(中古・中世)のカ系・ア系とソ系も、これとよく似た状況であったと考えられる。

以上の議論をもとに、日本語における聞き手領域指示の歴史を次のように捉え

²² Meira (2003)によれば、ブラジル北部、スリナム、ガイアナの一部で話されている先住民言語の1つであるティリヨ語(Tiriyó)(カリバン語族)でも、聞き手の近傍の対象を指示する場合、通例、中称の指示形式が使われるが、遠称の指示形式の使用も排除されていないとされる。

たい。

- (105) 元来、日本語指示詞の直示用法は、距離を明示的に符号化した有標の指示形式である近称コ系と遠称カ系（のちにア系）の二項体系であり、遠称形式は、二次的に、聞き手、及び、聞き手の近傍の対象を指示することもできた。中古以降、それまで主として非直示領域（照応用法、観念用法など）で用いられていた無標（中立）の指示形式であるソ系が直示用法を確立させたことで、聞き手領域指示としてカ系・ア系とソ系の併用状態が続くことになるが、聞き手領域を二次的に指示するに過ぎなかったカ系・ア系は、次第に聞き手領域を専用的に指示するソ系によって駆逐されていき、中世後期以降、聞き手領域指示はソ系と固定的に結びついていった。

聞き手領域指示がソ系と固定的に結びつくようになる指示詞の運用上の変化は、人称区分の反映の強化（ないしは、話し手と聞き手の対立的視点の反映の強化）とみなすことができるが、このような指示詞の運用上の変化は、非直示用法（非現場指示用法）においても認められる（澤田淳（2015））。金水敏・田窪行則（1992：188）は、現代語の観念用法（記憶指示用法）のア系は、「話し手が過去に直接体験として出会った対象を指示するのに用いられる」とする（金水敏（1999：71-72）も参照）。そのため、現代語では、相手によって導入された話し手にとって間接知識の対象は、人称区分（対立的視点）を反映する形で、ア系ではなく、ソ系で指示されるのが一般的である（金水敏・田窪行則（1990：97）、田窪行則（2010：252）参照）。古典語でも、次のように、相手によって導入された間接知識の対象をソ系で指し示す用例が認められる。

- (106) 弁の尼「一日、かの母君の文はべりき。忌違ふとて、ここかしこになんあくがれたまふめる、このごろもあやしき小家に隠ろへものしたまふめるも心苦しく、すこし近きほどならましかは、そこにも渡して心やすかるべきを、荒ましき山道に、たはやすくもえ思ひたたでなんとはいへりし」と聞こゆ。（中略）^燕「さらば、その心やすからん所に、消息したまへ。みづからやは、かしこに出でたまはぬ」とのたまへば、
（源氏物語・東屋・86頁）

一方で、藤本真理子（2018）で報告されているように、古典語では、相手によって導入された間接知識の対象を、話し手が遠称形式で指し示す用例も一定数認められる。たとえば、次の例は、右近から主人夕顔の遣児玉鬘との偶然の再会を果

たしたとする報告を受けた光源氏が、右近に玉鬘を養女として迎え取る意を語る場面である。光源氏にとって玉鬘は、過去の直接体験の中で出会った対象（直接知識の対象）ではなく、対話相手の右近から得た（得ていた）間接知識の対象であるが、ここでは、カ系「かの人」で指示されている²³。

- (107) かく聞きそめて後は、召し放ちつつ、源氏「さらば、かの人、このわたりに渡いたてまつらん。年ごろもののついでごとに、口惜しうまどはしつることを思ひ出でつるに、いとうれしく聞き出でながら、今までおぼつかなきも、かひなきことになむ。(略)」など語らひたまへば、
(源氏物語・玉鬘・121-122頁)

類例として、以下の例が挙げられよう。

- (108) 僧都「うちつけなる御夢語りにぞはべるなる。尋ねさせたまひても、御心劣りせさせたまひぬべし。故按察大納言は、世に亡くて久しくなりはべりぬれば、えしろしめさじかし。その北の方なむ、なにがしが姉妹にはべる。かの按察隠れて後、世を背きてはべるが、このごろわづらふことはべるにより、かく京にもまかでねば、頼もし所に籠りてものしはべるなり」と聞こえたまふ。源氏「かの大納言の御むすめものしたまふと聞きたまへしは。すきずきしき方にはあらで、まめやかに聞こゆるなり」と推しあてにのたまへば、
(源氏物語・若紫・212頁)

- (109) 後ならひたるにやあらむ、常に見えしらがひありく。やがて常陸の介とつけたり。衣も白めず、同じすすけにてあれば、いづちやりてけむなどにくむ。右近内侍のまゐりたるに、「かかる者をなむ、語らひつけて置きためる。すかして、常に来る事」とて、ありしやうなど、小兵衛といふ人にまねばせて聞かせさせたまへば、「かれいかで見はべらむ。かならず見せさせたまへ。御得意ななり。さらによも語らひ取らじ」など笑ふ。
(枕草子・八十三・153頁)

(108) では、光源氏にとって当該の指示対象（故按察大納言）は、基本的に間接知識の対象といえるが、カ系で指示されている。また、(109) でも、右近の内

²³ 藤本真理子（2018：114）は、古典語においては、「たとえ同一談話内において、初めて対象に関する情報を得た場合であっても、少なくとも話し手が対象の存在を現実世界に認めた場合、カ（ア）系列を用いてよいことが推測される」と述べている。

侍にとって当該の指示対象（常陸の介）は間接知識の対象であるが、カ系で指示されている。現代語では、いずれも、人称区分（話し手と聞き手の対立的視点）を反映したソ系で指示されるところである。なお、『新編日本古典文学全集』（新編全集）の現代語訳では、(107)の「さらば、かの人、このわたりに渡いたてまつらん」、(108)の「かの大納言の御むすめものしたまふと聞きたまへしは」、(109)の「かれいかで見はべらむ」は、それぞれ、「そういうわけなら、その人をこの邸にお迎え申すでしょう」（122頁）、「その大納言のご息女がいらっしゃるとうかがったことがあります、そのお方は」（212頁）、「その者をぜひ見たいものでございます」（154頁）とソ系で訳されている点にも注目されたい。

直示用法（現場指示用法）のみならず、非直示用法（非現場指示用法）の運用についても、歴史的に人称区分（話し手と聞き手の対立的視点）の反映が強まっていったといえるのである。

4.4. 相手発話を指示するア系「あんな」

最後に、相手の発話を指示するア系「あんな」の現象（澤田淳（2015））を取り上げておきたい。「-ンナ」形指示詞は近世期頃から見られる（岡崎友子（2010））。以下は、洒落本、人情本の作品からの用例であるが、ここでは、直前の相手の発話がソ系「そんな」で指示されている。

- (110) ㊦いやそれほどにまたおもわるるといふ事はたいていの事ではない
さだめし御馳走がよかつたものであろ。㊦郎あたいやらしい。そんな事いふてくれなすな。あのはなしはきくもいやじやはいな
（洒落本・陽台遺編・妣閣秘言（1758年刊）・21頁）
- (111) ㊦どふも。あいつも色男が。身のあだで。どこへ。いつでもそうお
ふに。されるから㊦琴さんが。いつそのほれて。居るよ㊦そふだらふ。
うぬも。いやじやアあるまい㊦そんな事は。知らない／＼。ばかを。
いわずとマア能ク聞きなよ（洒落本・南閨雑話（1773年刊）・61頁）
- (112) ㊦そんなら今のうち八もんじやの湯へはいつてあせをながしてこよ
う㊦そこらをかたづけはき出しながら よしなせヘナそんな事をいつて又おもて
へいきなはるだらう性わるをしなはるとおてうさんにいつつけやすよ
（洒落本・仕懸文庫（1793年刊）・28頁）
- (113) てる「なにさあのよふな者は女房をば可愛がるものさ 樂「もしかわい
がられては猶こてへられやすめへしつつこそふな顔色だねへ てる「そ
のひつつこいのがおひびがのぞみさ ひび「をやいかなあなたまでそ
んな事をおつしやるほほほほほわたくしはなんにものぞみはないが
替り目替り目に芝居を見せてくれる亭主が持とうござります

(人情本・明烏後の正夢 (1821年刊)) (CHJ)

- (114) 主「何さおいらあ斯して人に。遠慮をして居る身ぶんだから。不自由も何もしかたがねへ。どふも自由にならねへ身のうへだから ^{よね}「さあそれだからもうここを販りたくありませんよ 主「そんな事を言はねへで。どふかまた呉を見せてくん。そしてもうおそくなるだらふいいかへ
(人情本・春色梅児与美 (1832年刊)) (CHJ)

以下も、洒落本、人情本の作品からの例であるが、興味深いことに、ここでは、直前の相手の発話がア系「あんな」で指示されている²⁴。

- (115) 鳥「(略) ワヤ火が消へた。おまへの長ひ喜世留で行燈の火を付てくん 薄「アレサ油火は毒ざます。お倉どんの部屋から貰つて来て上申イせう ト立にかゝるを鳥雅は引とめ 鳥「ワイノそれをかこつけに何所へか行ふと思つて 薄「アレマアあんな邪推なことを。往とおつしやりいしても私やアすこしも行れイせん

(人情本・春告鳥 (1836-1837年刊)・巻之一・390頁)

- (116) 鳥「左様ノ、薄菊さんは気が利て居るヨ ^{きく}「ぬしはよく私の名を知つて居なますねへ」 鳥「実があるだらう 薄「ぬしは薄菊さんに気があるとき。それだから油断はなりイせん ^{きく}「ワヤノおめらんはあんなことを トさもきのどくそふなるかほいろをする

(人情本・春告鳥 (1836-1837年刊)・巻之一・385-386頁)

- (117) ^{たみ}「睦をお吐遊ばしませ。御本家で何とおつしやいました 鳥「エなんと、いつておれが見せへ往たとき、母人さんがおつしやるには、どふもお民を此方へ置と色をしたがつてならなひのに、寄ものもさはるものも惚たがつてならねへから、寮へでもやつて置ふ。左様したら人出入がなひから情人も出来まいと左様いつておよこしなさつたものを ^{たみ}「ヲホ、ゝ、あんな睦をおつしやいます。どふいたして私の様な賤しいものに誰がかまひてがござりますものか

(人情本・春告鳥 (1836-1837年刊)・巻之二・401頁)

- (118) ^{おきく}「よくこのマアお寒いに、貴方もよつほど小三さんにやア御信仰でございますネ。」 ^金「御推察の通りス。しかしおめへなんぞも容貌はよし、氣めへといひ、しん心をする男が多からう。」 ^{おきく}「オヤよろしく申しておくんなさい。なんの私のやうな者を、つめつてくれる

²⁴ これらの例のア系は、相手の発話を承けたものである点では文脈指示的であるが、眼前の相手の発話が指示対象となる点では現場指示的であるともいえる。

人もございませんヨ。」金「うまくいふぜ。しつぽりと、しんねこではまぐりのお吸物をしめてる人が、のうお菊さん。」おきく「オホ、、、あんな、憎らしい事を、小さんさんにいつつけますよ。」

(人情本・仮名文章娘節用(1831年-1834年刊)・前編下巻・50頁)

- (119) 柳なアに。わつちのやうな者ア。来てもこなくッても。おめへさんは何もおさしつかへなしサ。清さんだの峠やの平さんだのと。色男のうへ。第一大坂のお人といふもんだから。わつちがやうな田舎ものゝ。明日にもどつちへかたびさうなものとは。ちがうはな。末はからすの鳴わかれといふ歌さへあるはサ 天又あんなひ肉いひなさる。このあいだもくどいほど文にいふてあげました通り。もしやあなたが腹をたてなさつて。おいでなさらんといふと。わたしや死でしまう気で居ました。

(洒落本・色深猿睡夢(1826年刊)・306-307頁)

(115)における遊郭のおいらん薄雲(薄)の発話内のア系(「あんな邪推なこと」)は、聞き手である客の鳥雅(鳥)の直前の発話を指し示す。また、(116)では、新造(手伝い女郎)薄菊(きく)の発話に、(117)では、鳥雅に仕える腰元(侍女)お民(たみ)の発話に、(118)では、芸者のお菊(おきく)の発話に、(119)では、遊女の大角の発話に、直前の相手発話を指示するア系の使用が認められる²⁵。

(115)-(119)のように、直前の相手発話を指示するア系は、「-ンナ」系指示詞(「あんなこと」など)で実現し、一般に、直前の相手の冗談や軽口などの発言を軽く突き放すような場面で使われる。また、詳細な調査は今後の課題となるが、相手発話を指示するア系「あんな」の使用者は女性に偏る傾向も認められるようである。

このような相手の発話を指示するア系は、以下のように、明治期以降の小説作品の中でも見られる。

- (120)「なかなか追窮するね。それよりか御前今日は大変立派なものを縫っ

²⁵ 次の花鳥(花)によるア系の発話は、傍にいる薄雲(うす)に向けた発話であると考えられ、ここで問題とするア系の用法とは(元は同じ用法である可能性もあるが)厳密には区別される。

(i) そで「私ばかり待人もなし 花「ヲヤ吉兵衛さんはへ そで「アレ否ぎますヨ。老父めへ 花「アレマア鳥渡見なまし。あんな事をお言なますヨ うす「じやうだんぢやアありません。吉兵衛さんは実正に能老父さんぎますヨ 花「実正に大事にして上なましヨ (人情本・春告鳥(1836-1837年刊)・巻之四・438頁)

てるね。何だいそれは」

「これ？ これは伊勢崎でしょう」

「いやに光つくじゃないか。兄さんのかい」

「阿爺のよ」

「阿爺のもののばかり縫って、ちっとも兄さんには縫ってくれないね。

狐の袖無以後御見限りだね」

「あらいやだ。あんな嘘ばかり。今着ていらっしゃるのも縫って上げたんだわ」
(夏目漱石『虞美人草』167頁)

- (121) (略) いつ大森がベルを押したか、女中がはいって来た。

『これは奇妙不思議だ、中西へ手紙をやらうとすると、お蝶さんがやって来る、争そへんものだ、』と大森が十七八の小娘に手紙を渡す。

『アラ又あんな事をおツしやる、中西さんなんか何でもないワ、眞實に私くやしいわ、皆なして擲^{から}掬^かふんだもの』と手紙を奪^{ふん}取るように取^だつて『可^いいわ、そんな事をおツしやるなら此のお手紙^どを何處^うへ打捨^つてしまふから。』

(国木田独歩「疲勞」『明治文學全集66 國木田獨歩集』所収、220頁)

- (122) 「結婚したら来てもらえなくなるね。」と信吾は言ったが、

「どうかしたの？ なにか話があって来たんじゃないのか。」

「いいえ。」

「遠慮なく言っていていいよ。こっちは頭が鈍って、少しぼけてるからね。」

「あんなとぼけたことおっしゃって。」と英子は妙な言い方をした。

(川端康成『山の音』142頁)

- (123) 「じゃ、三十四ね。年を食ってるというほどでもないわ。それに、あなたの場合、いままで勉強で結婚の暇がなかったんですもの、女としてそのくらいの方が魅力だと思いますわ」

「そうですね。しかし、ぼくはついうかうかと過ぎてしまったが、一つは、自分ながら風采が上らないと知っているので、いままで縁がなかったのも、半分はそれだと思っていますよ。だから、べつにこれからも高い望みはしていませんがね」

「あんなことを言って……」

と、折戸二郎の妻は改めて小関を眺めるような眼をした。

(松本清張『葦の浮船』80頁)

- (124) 「ママは今日の旅行のことを、先生には言わなかったんですか？」

「聞いてないね」

(中略)

「ご心配でしょ？」

ルミ子はナブキンで口をふき、上眼づかいに彼を見た。その眼もとは微笑っていた。

「そうでもないがね」

「あら、あんな強がりをいって……」

「今さら嫉妬の炎を燃やすほどでもないよ。だいぶん長い間柄だからね」
(松本清張『混声の森 (上)』252頁)

- (125) ルミ子があまり憤慨するので、謙一はかえって彼女が加寿子の行く先を知っていると思った。

「まあ、先方がそういう気持ちになったら、ほくもそうかと思うだけで、これからはそれなりのつき合い方があるがね」

「あんなさとり切ったことをおっしゃって。……それ、本気なんですか？」

「仕方がないよ。去る者は追わず、という古いコトワザもある」

「まあ」
(松本清張『混声の森 (上)』255頁)

- (126) 「それ、本当ですか？」

「嘘だと思うなら、秦野に訊いてみろ」

「まあ、ひどいわ。秦野さん、ちっともそんなことわたしに言わないんだもの」

「そうか、おまえには、教えなかったか？」

「あんなこと言って、とほけてるわ」

「おれは、秦野がとつくに、おまえに話していると思ったよ」

(松本清張『けものみち』641頁)

- (127) 「うむ……あ、また腹が痛くなったな。民子、少し腹を揉んでくれんか」

「またあんなことを。ずうずうしいわ」

「ふアふアふア」

と老人は笑う。
(松本清張『けものみち』538頁)

- (128) 「失礼します、笠原さん。この次、ゆっくりいらしてね」

美しいデザイナーは祥子に微笑した。

「伺わせて頂きます」

おじぎをすると、鶴巻画伯が祥子の傍にきた。

「笠原君、佐敷泊雲にはあまり近づかない方がいいですよ。あれで、女の方は相当なものだからね」

「まあ、あんなことを」

宇野より子が、画伯の肩を押すようにした。

(松本清張『黒い樹海』210頁)

- (129) 「どうだ、おいしいかね？」

局長は子供に言うように訊いた。

「ええ」

「よかった。社の食堂よりは少し高級かも知れないから、この際、鰯腹食べたまえ」

「あら、女の子って男性の前ではそんなに食べられないものよ」

横から女中が口を入れて笑った。

「男性といっても、ぼくはこの人の恋愛の対象にはならないからね。悟りしました老人だ」

「あら、あんなことを言って、怪しいもんだわ」

「まあ、君は黙っておれ。少し、この人と話したいことがある」

「はいはい。では、邪魔者はしばらく下に消えます」

女中は襖を閉めて出て行った。（松本清張『翳った旋舞』143-144頁）

- (130) 「着物もだけど、たまにはその恰好のほうが新鮮だ」

「宗三さんがそう言うなら、もう二、三着つくるわ」

「ご主人はどう言

ってた？」

「え？」

と、眼を大きく開いて、手で宗三を打つしぐさをした。

「また、あんなこと言って、きらいだわ。せっかく、いつもより二か月早く遇えると思って、いそいそと出て来たのに……」

（松本清張「内海の輪」『内海の輪 他一篇』所収、60-61頁）

- (131) 「いい知恵が浮かんだでしょ。あなたともう一晩いっしょに居られるし、連絡船で四時間もかかるところを飛行機は一時間で松山まで直接に行っちゃうのだし……うれしいわ」

美奈子は浮き浮きして宗三の手をかたく握った。

「しょうがないな。じゃ、そうするかな」

「あんなこと言って。あなただってうれしくせに」

（松本清張「内海の輪」『内海の輪 他一篇』所収、101頁）

- (132) 「そのうち、いい場所があったら越すんだな」

「あら、また引越し？」

女は男の横顔を見た。

「そんなに、たびたび、うつらなければいけないんですか？」

「そういうわけじゃないが」

「今度のところに移って、前のアパートの良さがわかりましたわ。買物も近いし、都心に出るのも気が楽なんです。今の場所だと、何となく泥くさいし、気持ちがめいっちゃうわ。あなたの言いつけだから、しかたがないけれど」

「そりゃあ、仕方がないよ。君が悪いんだ」

「あんなことを言って」

恵美子は握った関川の手に力を入れた。

(松本清張『砂の器(上)』220頁)

- (133) 「今日は負けましたわ」

といったときは、匂い立つような化粧をすませた顔をこちらに向けていた。ゴルフの話で径子ははしゃいでいる。

「いや、君もうまくなった」

大塚は微笑していった。

「もう、僕のハンディに追いつくのもすぐだよ」

「あんなこと」

径子は大塚をにらんで、

「今日のあなたは特別でしたわ。私のできの悪かったのは、風のせいよ。球が思うところに伸びないんですもの」

(松本清張『霧の旗』141-142頁)

- (134) “ちどり”は市内でも二流の料理屋だが、女中は十二三人いた。石田はここにときどき来るらしく、みんなイーさん、イーさんと言っていた。「竹中さん、こいつはお春といってね、ここの古狸なんだ。こんな顔でも自信があるとみえて、ぼくが前にずいぶん口説いたが、どうしても乗ってこなかったしたたかものさ」

石田が、宗吉の横にべったりとすわった女のことを言った。(中略)

「あんなこと言っている。イーさんと違って、こちら純情そうね。どうぞ、ターさん、いれさせてね」

お春という女は宗吉に酌をした。

(松本清張「鬼畜」『松本清張傑作総集Ⅰ』所収、285-286頁)

- (135) 「課長さん、とっても着物がお似合いですわ」

すかさず橋本啓子が声をあげた。

「そうですか。いや、女性の方にほめられると、年がいもなくうれしいですな」

「あら、あんなことおっしゃって。課長さん、まだお若いわ。ねえ？」と、これは横にいる庶務の和島好子に投げかけた。

(松本清張『ガラスの城』28-29頁)

- (136) 「いいとこだな、ここにいると落ちつくな」

「もう古いんですよ。あそこに勤めてからずうっと住んでいますから」

「ホテル引き払ってこっちに移ろうかな。宿代も助かるしな」

「あんなことをいって…」

美代子は台所に戻って朝食の仕度を続けた。

(高橋三千綱『オンザティ』)(BCCWJ)

これらの例では、相手発話を指示するア系「あんな」は、直前になされた相手の冗談や軽口などの発言を軽く突き放すような場面で使われており、いずれも女性の発話の中で見られる。この点で、近世期の(115)-(119)のような用例との相似性が認められる²⁶。

このような相手の発話を指示するア系「あんな」の使用は、現代では聞かれな

²⁶ 以下のような直前の相手発話が冗談、軽口などではない(真面目な発話である)場合には、ソ系「そんな」で指すのが一般的であるといえる。

- (i) 「よかったですね、安心しました」

「ほんとにご心配かけました。わざわざここまで来てくださったりして。」

「いや、そんなこと……」

人々が散って、禎子と本多とだけがそこに取り残された。風が足もとから吹いた。

(松本清張『ゼロの焦点』86頁)

- (ii) 「やっと、落ちついたのよ。」

嫂は、禎子に言った。

「あれから、お葬式だの、後始末だの、それは大変だったの。」

「すみませんでした。」

禎子は詫びた。

「お義兄さまのお葬式にもうかがえないで。」

「いいえ、そんなこと。あなたはあなたなりに大変なんですよもの。どう、その後、憲一さんのことは？」

(松本清張『ゼロの焦点』244頁)

なお、次のように、直前の相手発話が冗談、軽口である場面において、ソ系「そんな」が使われることもあるが、この場合、ソ系「そんな」は、ア系「あんな」に置き換え可能となる。

- (iii) 断魚荘に戻ったのは二時ごろだった。

「お帰んなさい。今日は早かったですね」

アキ子が迎えた。

「用件が早く済んだのでね」

「お昼食は？」

「未だだよ。アキ子さんの顔を見ながら食べようと思って、どこにも寄らずに帰ってきた」

「またそんなことを云って。そりゃお腹がお空きになったでしょう」

(松本清張『数の風景』171-172頁)

くなってきているといえる²⁷。現代では、このような場合、人称区分（対立的視点）を反映するソ系「そんな」の使用が一般的であり、ここでも、ア系がソ系によって駆逐されていく（ア系がソ系に置き換わっていく）変化が認められる。

5. おわりに

本稿では、日本語の指示詞の運用の歴史において、聞き手領域指示のあり方がどのように変化してきたのかについて考察を行った。

元来、日本語指示詞の直示用法は、距離を明示的に符号化した有標の指示形式である近称コ系と遠称カ系（のちにア系）の二項体系であり、遠称形式は二次的に聞き手及び聞き手の近傍の対象を指示することもできた。中古以降、それまで主として非直示領域（照応用法など）で用いられていた無標（中立）の指示形式であるソ系が直示用法を確立させたことで、聞き手領域指示としてカ系・ア系と

²⁷ この点を確認するため、大学生（学部生）236名（主に青山学院大学文学部日本文学科在籍。年齢層：主に10代～20代（1名60代）。主に関東圏出身）を対象に、以下の実例を用いた簡単なアンケート調査を行った（2014年6月、9月、2015年7月、2016年10月、2025年12月に実施）。アンケートでは、(i)、(ii)の例では、相手の発言に対して「あんなこと云って／あんなことを」と答えているが、このようなア系指示詞を使うかどうかを尋ねた。

(i) 「(略) もう、結婚なすってどれぐらい経ちます？」

「そろそろ、十年ですよ。だんだん詰まらなくなってきました」

「あんなこと云って。でも、奥さんはお仕合わせですわ。何といっても、旦那さまに死なれるほど、女は困ることはありません」

（松本清張『潜在光景』『影の車』所収、15頁）

(ii) 「しかし、電話に出たやつが、ぼくの声覚えていないかな？」

「大丈夫よ。わかりっこないわ。わたしにかかってくるお客さんの電話は多いんですから」

「売れっ子だからな」

「あんなことを。そりゃあ商売してるんですもの、少しはお客さまを持たないと、肩身がせまいわ」

（松本清張『砂の器（上）』156頁）

選択肢として、「a. 使う」、「b. 自分は使わないが、おかしくない」、「c. 自分は使わないし、違和感がある」の3つを設定し、その中から当てはまるものを1つ選ぶよう指示した。結果は次の通りであった。

(iii) a. 使う：12人（5.1%）

b. 自分は使わないが、おかしくない：35人（14.8%）

c. 自分は使わないし、違和感がある：189人（80.1%）

この場合、「自分だったら「そんな」を使う」といった回答記述が多く見られた。

ソ系の併用状態が続くことになるが、聞き手領域を二次的に指示するに過ぎなかったカ・ア系は、中世後期以降、次第に聞き手領域を専用的に指示するソ系によって駆逐されていき、聞き手領域指示はソ系と固定的に結びついていった。聞き手領域指示がソ系と固定的に結びつくようになる指示詞の運用上の変化は、人称区分の反映の強化（ないしは、話し手と聞き手の対立的視点の強化）とみなすことができるが、このような指示詞の運用上の変化は、非直示用法においても認められる。

人称区分（話し手と聞き手の対立的視点）を反映した運用の強化は、指示詞以外のダイクシス表現においても認められる（金水敏（2010、2018）、澤田淳（2011、2015、2022a））。たとえば、古代語では、聞き手領域への話し手の移動を表す場合、「行く」で表すことも、「来」（「来」の謙譲語「参り来」を含む）で表すこともできた（近藤泰弘（2000）、金水敏（2010）、澤田淳（2016b））。中世期以降、話し手による聞き手領域への移動を表す場合、専ら「行く」が使用されることになる。現代語の直示移動動詞の運用は、聞き手による話し手領域への移動を表す場合には「来る」、話し手による聞き手領域への移動を表す場合には「行く」を用い、両形式の明確な使い分けが認められる点で、人称区分（話し手と聞き手の対立的視点）を反映した運用の強化が認められる。人称区分（話し手と聞き手の対立的視点）の反映を強化する方向への変化は、日本語の敬語運用の歴史において「内外型」の相対敬語（澤田淳（2022a、2022b））の運用が確立する変化などでも認められ、日本語の歴史的变化の一潮流をなしている。

今後は、地理的変異（諸方言）を含む通言語的な視点から、指示詞を含む日本語ダイクシス表現の歴史的諸相をよりダイナミックに捉えていきたい。

引用例出典

- 続日本紀宣命：北川和秀（編）『続日本紀宣命 校本・総索引』吉川弘文館、1982年
延喜式祝詞：築島裕（監修）・沖森卓也（編）『東京国立博物館蔵本延喜式祝詞総索引』汲古書院、1995年
万葉集：小島憲之・木下正俊・東野治之（校注／訳）『新編日本古典文学全集 6 ～ 9 ・ 萬葉集（1）～（4）』小学館、1994 ～ 1996年
古今和歌集：小沢正夫・松田成徳（校注／訳）『新編日本古典文学全集11・古今和歌集』小学館、1994年
伊勢物語、大和物語、平中物語：片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子（校注／訳）『新編日本古典文学全集12・竹取物語／伊勢物語／大和物語／平中物語』小学館、1994年
うつほ物語：中野幸一（校注／訳）『新編日本古典文学全集14・うつほ物語（1）～（3）』小学館、1999年～2002年

- 落窪物語、堤中納言物語：三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬二（校注／訳）『新編日本古典文学全集17・落窪物語／堤中納言物語』小学館、2000年
- 枕草子：松尾聰・永井和子（校注／訳）『新編日本古典文学全集18・枕草子』小学館、1997年
- 源氏物語：阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男（校注／訳）『新編 日本古典文学全集20～25・源氏物語（1）～（6）』小学館、1994年～1998年
- 和泉式部日記、更級日記、讃岐典侍日記：藤岡忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫（校注／訳）『新編日本古典文学全集26・和泉式部日記／紫式部日記／更級日記／讃岐典侍日記』小学館、1994年
- 大鏡：橘健二・加藤静子（校注／訳）『新編日本古典文学全集34・大鏡』小学館、1996年
- 今昔物語集：馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰（校注／訳）『新編日本古典文学全集35～38・今昔物語集（1）～（4）』小学館、1999～2002年
- 平治物語：松林靖明・信太周・犬井善寿（校注／訳）『新編日本古典文学全集41・将門記／陸奥話記／保元物語／平治物語』小学館、2002年
- 徒然草：神田秀夫・永積安明・安良岡康作（校注／訳）『新編日本古典文学全集44・方丈記／徒然草／正法眼蔵随聞記／歎異抄』小学館、1995年
- 平家物語：市古貞次（校注／訳）『新編日本古典文学全集45、46・平家物語（1）（2）』小学館、1994年
- 宇治拾遺物語：小林保治・増古和子（校注／訳）『新編日本古典文学全集50・宇治拾遺物語』小学館、1996年
- 沙石集：小島孝之（校注／訳）『新編日本古典文学全集52・沙石集』小学館、2001年
- 謡曲集：小山弘志・佐藤喜久雄・佐藤健一郎（校注／訳）『新編日本古典文学全集58、59・謡曲集（1）（2）』小学館、1997年、1998年
- 義経記：梶原正昭（校注／訳）『新編日本古典文学全集62・義経記』小学館、1999年
- 近松門左衛門集：鳥越文蔵・山根為雄・長友千代治・大橋正叔・阪口弘之（校注／訳）『新編日本古典文学全集74～76・近松門左衛門集（1）～（3）』小学館、1997年～2000年
- 春告鳥：中野三敏・神保五彌・前田愛（校注／訳）『新編日本古典文学全集80・洒落本・滑稽本・人情本』小学館、2000年
- 東海道中膝栗毛：中村幸彦（校注／訳）『新編日本古典文学全集81・東海道中膝栗毛』小学館、1995年
- 天草版平家物語：江口正弘（著）『天草版平家物語 対照本文及び総索引 本文篇』明治書院、1986年
- 大蔵虎明能狂言集：大塚光信（編）『大蔵虎明能狂言集 翻刻 注解 上巻／下巻』清文堂出版、2006年

仮名文章娘節用：『近代日本文学大系 第21巻 人情本代表作集』国民図書、1928年
陽台遺編・姘閣秘言、南閩雜話：洒落本大成編集委員会（編）『洒落本大成 第三巻』
中央公論社、1979年
仕懸文庫：洒落本大成編集委員会（編）『洒落本大成 第十六巻』中央公論社、1982年
色深猿睡夢、箱まくら：洒落本大成編集委員会（編）『洒落本大成 第二十七巻』中央
公論社、1987年
川端康成『山の音』（新潮文庫）、新潮社、1957年
国木田独歩：『明治文学全集66 国木田獨歩集』筑摩書房、2013年
夏目漱石『虞美人草』（角川文庫）、KADOKAWA、2017年
堀辰雄『風立ちぬ・美しい村』（新潮文庫）、新潮社、1951年
松本清張『葦の浮船』（角川文庫）、KADOKAWA、2021年
松本清張『内海の輪 他一篇』（角川文庫）、角川書店、1974年
松本清張『翳った旋舞』（光文社文庫）、光文社、2019年
松本清張『影の車』中央公論社、1961年
松本清張『数の風景』（角川文庫）、KADOKAWA、1990年
松本清張『ガラスの城』（新装版、講談社文庫）、講談社、2023年
松本清張『霧の旗』中央公論社、1961年
松本清張『黒い樹海』（講談社文庫）、講談社、1973年
松本清張『けものみち』（新潮文庫）、新潮社、2005年
松本清張『混声の森（上）（下）』（光文社文庫）、光文社、2015年
松本清張『砂の器（上）（下）』（新潮文庫）、新潮社、1973年
松本清張『ゼロの焦点』光文社、1959年
松本清張『松本清張傑作総集Ⅰ』新潮社、1993年
松本清張『松本清張傑作総集Ⅱ』新潮社、1993年
チャールズ M. シュワルツ（著）・谷川俊太郎（訳）『SNOOPY① 行くよ！ 今行くよ！』
角川書店、2002年
チャールズ M. シュワルツ（著）・谷川俊太郎（訳）『SNOOPY② みんなそろったかい？』
角川書店、2002年

使用コーパス

現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）（中納言 2.7.3データバージョン 形態論情
報 2021.03, 分類語彙表情報 2025.03）
日本語歴史コーパス（CHJ）（中納言 2.7.2データバージョン 2025.03）

参考文献

Anderson, Stephen R. and Edward L. Keenan (1985) Deixis. In: Timothy Shopen (ed.)

- Language Typology and Syntactic Description: Volume 3*. 259-308. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carter, Ronald and Michael McCarthy (2006) *Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Diessel, Holger (1999) *Demonstratives: Form, Function, and Grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Diessel, Holger (2013) Distance contrasts in demonstratives. In: Matthew S. Dryer and Martin Haspelmath (eds.) *WALS Online*. (Available online at <http://wals.info/chapter/41>, Accessed on 2023-09-14.)
- 江富範子 (1988) 「萬葉の「その」」『國語國文』57 (2) : 17-30.
- Fillmore, Charles. J. (1982) Towards a descriptive framework for spatial deixis. In: Jarvella, Robert. J. and Wokfgang Klein (eds.) *Speech, Place, and Action: Studies in Deixis and Related Topics*. 31-59. Chichester: John Wiley and Sons Ltd.
- 藤本真理子 (2008) 「ソ系列指示詞による聞き手領域の形成」『語文』90: 40-53. 大阪大学国語国文学会.
- 藤本真理子 (2009) 「「古代語のカ (ア) 系列指示詞」再考」『日本語文法』9 (2) : 122-138.
- 藤本真理子 (2016) 「〈聞き手領域〉に関わるア系列の指示—中世を中心に—」青木博史・小柳智一・高山善行 (編) 『日本語文法史研究 3』東京: ひつじ書房.
- 藤本真理子 (2018) 「中古のカ (ア) 系列とソ系列の概念指示用法—古典語における知識の切り替わりから—」岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太 (編) 『バリエーションの中の日本語詞史』103-118. 東京: くろしお出版.
- 橋本四郎 (1963) 「万葉の「彼」」『女子大國文』28: 1-13. 京都女子大学国文学会.
- 橋本四郎 (1966) 「古代語の指示体系—上代を中心に—」『國語國文』35 (6) : 329-341.
- 橋本四郎 (1982) 「指示語の史的展開」川端善明ほか (編) 『講座日本語学 2 文法史』217-240. 東京: 明治書院.
- 堀口和吉 (1978) 「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8: 23-44. 大阪外国語大学.
- Huang, Yan (2014) *Pragmatics*. Second edition. Oxford: Oxford University Press.
- 井出至 (1960) 「所謂遠称の指示語ヲチ・ヲトの性格」『國語と國文學』37 (8) : 43-51.
- 井出至 (1991) 「指示詞とその歴史」辻村敏樹 (編) 『講座日本語と日本語教育10 日本語の歴史』148-174. 東京: 明治書院.
- 片岡了 (1973) 「コ・ソ・カ変遷の一面」『文藝論叢』1: 39-47. 大谷大学文藝研究會.
- 金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6 (4) : 67-91.
- 金水敏 (2001) 「指示詞—「直示」再考—」中村明 (編) 『現代日本語必携』160-163. 東京: 学燈社.

- 金水敏 (2010) 「『敬語優位から人称性優位へ』再考」『語文』92・93: 74-80. 大阪大学国語国文学会.
- 金水敏 (2015) 「指示詞の記述に関する一試案」関西言語学会第40回大会発表資料.
- 金水敏 (2018) 「日本語の歴史」日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』725-729. 東京: 東京堂出版.
- 金水敏・田窪行則 (1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3: 85-116. 日本認知科学会.
- 金水敏・田窪行則 (1992) 「日本語指示詞研究史から／へ」金水敏・田窪行則 (編) 『指示詞』151-192. 東京: ひつじ書房.
- 金水敏・岡崎友子・曹美庚 (2002) 「指示詞の歴史的・対照言語学的研究—日本語・韓国語・トルコ語—」生越直樹 (編) 『対照言語学』217-247. 東京: 東京大学出版会.
- 衣畑智秀 (2021) 「琉球諸語と上代日本語からみた祖語の指示体系試論」林由華・衣畑智秀・木部暢子 (編) 『フィールドと文献からみる日琉祖語の系統と歴史』190-213. 東京: 開拓社.
- 衣畑智秀 (2022) 「上代語指示詞の指示特徴—文献を用いた観察データの構築法—」『福岡大学人文論叢』54 (3) : 629-670.
- Kinuhata, Tomohide and Yuka Hayashi (2018) On the anaphoric use of demonstratives in Miyakoan. In: Shin Fukuda, Mary Kim and Mee-Jeon Park (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 25*. 35-47. Stanford: CSLI Publications.
- 近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』東京: ひつじ書房.
- 黒田成幸 (1979) 「(コ)・ソ・アについて」林栄一教授還暦記念論文集刊行委員会 (編) 『英語と日本語と』41-59. 東京: くろしお出版.
- 李長波 (2002) 『日本語指示体系の歴史』京都: 京都大学学術出版会.
- Levinson, Stephen C. (2004) Deixis. In: Laurence R. Horn and Gregory Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*. 97-121. Oxford: Blackwell Publishing Ltd.
- Levinson, Stephen C. (2018) Yéli Dnye: Demonstratives in the language of Rossel Island, Papua New Guinea. In: Stephen C. Levinson, Sarah Cutfield, Michael J. Dunn, N. J. Enfield, and Sérgio Meira (eds.) *Demonstratives in Cross-Linguistic Perspective*. 318-342. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, Stephen C. (2022) *A Grammar of Yéli Dnye*. Berlin: Walter de Gruyter GmbH.
- Meira, Sérgio (2003) Addressee effects in demonstrative systems: The cases of Tiriyo and Brazilian Portuguese. In: Friedrich Lenz (ed.) *Deictic Conceptualisation of Space, Time and Person*. 3-11. Amsterdam: John Benjamins.
- 三上章 (1955) 『現代語法新説』東京: 刀江書院.
- 三上章 (1970) 『文法小論集』東京: くろしお出版.

- 小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』大阪: 和泉書院。
- 岡崎友子（2010）『日本語指示詞の歴史的研究』東京: ひつじ書房。
- 岡崎友子（2021）「上代の指示代名詞について」『國語と國文學』98（12）: 50-65.
- 佐伯梅友（1950）『奈良時代の國語』東京: 三省堂。
- 迫野虔徳（2012）『方言史と日本語史』東京: 清文堂出版。
- 澤田淳（2011）「日本語のダイクシス表現と視点、主観性」澤田治美（編）『ひつじ意味論講座 5 主観性と主体性』165-192. 東京: ひつじ書房。
- 澤田淳（2013）「視点、文脈と指標性—英語指示詞における聞き手への指標詞シフトの現象を中心に—」『語用論研究』15: 1-23.
- 澤田淳（2015）「ダイクシスからみた日本語の歴史—直示述語、敬語、指示詞を中心に—」加藤重広（編）『日本語語用論フォーラム 1』57-100. 東京: ひつじ書房。
- 澤田淳（2016a）「指示と照応の語用論」加藤重広・滝浦真人（編）『語用論研究法ガイドブック』49-76. 東京: ひつじ書房。
- 澤田淳（2016b）「日本語の直示移動動詞「行く／来る」の歴史—歴史語用論的・類型論的アプローチ—」山梨正明ほか（編）『認知言語学論考 No. 13』185-259. 東京: ひつじ書房。
- 澤田淳（2022a）「日本語敬語の運用に関する語用論的研究—相対敬語の類型化をもとに—」近藤泰弘・澤田淳（編）『敬語の文法と語用論』114-182. 東京: 開拓社。
- 澤田淳（2022b）「中古日本語における敬語抑制のシステムについて—韓国語との対照を含めて—」青木博史・小柳智一・吉田永弘（編）『日本語文法史研究 6』25-59. 東京: ひつじ書房。
- 澤田淳（2024）「日本語の指示詞の意味と語用論—ソ系指示詞の直示用法を中心に—」岸本秀樹・日高俊夫・工藤和也（編）『レキシコン研究の新視点—統語・語用と語の意味の関わり—』130-158. 東京: 開拓社。
- 澤田淳・多田知子・岡田純子（2023）「古代語の近称指示詞「この」の記憶指示用法について—「かの」「あの」「その」との対照を含めて—」『青山語文』53: 217-272.
- 清水功（1959）「いわゆる遠称の指示語の一特殊用法について」『名古屋大学国語国文学』2: 51-62
- 清水功（1962）「中古・上代の「ソ」系指示語について—上代指示体系考察の一環として—」『名古屋大学国語国文学』10: 1-10.
- 清水功（1973）「平家物語における指示語の特殊用法について—指示体系の変遷に関連して—」金田一春彦・清水功・近藤政美（編）『平家物語総索引』464-481. 東京: 学習研究社。
- 清水功（1980）「言語における理解行為と場面論—日本語の話材語・待遇語を中心として—」『椋山国文学』4: 1-18.
- 田窪行則（2010）『日本語の構造—推論と知識管理—』東京: くろしお出版。

山田孝雄（1954）『奈良朝文法史』東京: 宝文館出版.

山口堯二（1990）「指示体系の推移」国語語彙史研究会（編）『国語語彙史の研究
十一』 157-174. 大阪: 和泉書院.

山中梓（2025）「人称詞「あなた」の成立」『日本語文法』 25（1）: 3-19.

（さわだ・じゅん／本学教授）